

与助尾根南遺跡

1980

茅野市教育委員会

与助尾根南遺跡

1980

茅野市教育委員会

序 文

与助尾根南遺跡の発掘調査は、茅野市が新尖石考古館を特別史跡尖石遺跡と与助尾根遺跡の中間地にある南大塩区有地に建設することに伴って、実施したものである。

発掘調査に当っては、茅野市教育委員会では記録保存することとし、この発掘調査を与助尾根南遺跡調査委員会に委託することとした。

発掘作業は、昭和53年5月29日に開始され、茅野市運動公園内の下ノ原遺跡発掘のため7月8日にいったん打切り、8月23日に再開して、9月2日に終了した。さらに、同敷地内の配水管埋設工事のため、翌昭和54年3月に追加調査をした。

発掘区域内から発見された遺構は、竪穴住居址5基、小竪穴3基、特殊遺構1個であり、特殊な遺物も発見されている。この調査によって、尖石台地の北縁に、しかも与助尾根遺跡に近接して、小規模であるが同時期に集落がつくられていたことは、縄文中期の集落構成や社会構造を解明する上に新たな資料を提供したわけである。

この発掘から報告書作成に至る間に、唐木孝雄・樋口昇一・宮坂光昭・岡角昭二の諸氏にご教示を賜わり、遺物整理には、宮坂篤夫・柳平嘉彦の両氏の協力を願った。調査員としては、宮坂虎次・鶴飼幸雄が当り、守矢昌文が補助した。報告書は以上の3氏が分担執筆し、編集は鶴飼が行った。

発掘調査が無事終了し、記録保存されて、新尖石考古館が完成しましたことは、地元南大塩区の敷地提供をはじめ、調査委員会並びに関係者のご尽力によるものと深く感謝申し上げて序文とする次第である。

昭和55年1月

茅野市教育長 木 川 千 年

例　　言

- 1 本書は茅野市尖石考古館建築に伴う与助尾根南遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は与助尾根南遺跡調査委員会が茅野市より委託を受けて行ったものであり、調査委員会組織等の名簿は発掘調査関係者名簿として別掲してある。
- 3 発掘調査は昭和53年5月29日から7月8日までと、同年8月23日から9月2日まで行い、一部昭和54年3月にも行った。出土品の整理及び報告書の作成は昭和54年8月から昭和55年2月まで茅野市尖石考古館において行った。
- 4 発掘から報告書作成にいたる過程で、唐木孝雄・樋口昇一・宮坂光昭の諸氏に御教示を賜わった。また、遺物整理にあたっては宮坂薫夫・柳平嘉彦両氏の協力を得た。ここに記して深く感謝の意を表したい。
- 5 石器の石質については両角昭二氏（岡谷市神明小学校長）に鑑定していただいた。
- 6 本書は宮坂虎次・守矢昌文・鵜飼幸雄の3名で分担執筆し、編集は鵜飼が行った。
- 7 出土品・諸記録は茅野市尖石考古館で保管している。

目 次

序 文

例 言

第Ⅰ章 調査経緯 1

　第1節 調査にいたるまでの経過 1

　第2節 発掘調査の経過 1

第Ⅱ章 遺跡概観 5

　第1節 立地および地理的環境 5

　第2節 歴史的環境 5

第Ⅲ章 遺 構 9

　第1節 住居址 9

　第2節 小竪穴 17

　第3節 その他の遺構 21

第Ⅳ章 遺 物 23

　第1節 土 器 23

　第2節 石 器 46

　第3節 土 製 品 53

第Ⅴ章 調査の成果と課題 56

　第1節 調査区における遺物の分布と出土状態 56

　第2節 小竪穴について 58

　第3節 第5号住居址について 60

　第4節 中期後半の集落について 62

第VI章 結 語 70

插 図 目 次

第1図	遺跡位置図	3
第2図	遺跡周辺の地形と発掘区	4
第3図	発掘区内遺構分布図	8
第4図	第1号住居址	10
第5図	第1号住居址出土遺物分布図	11
第6図	第1号住居址 炉址	12
第7図	第2号住居址	13
第8図	第3号住居址	14
第9図	第4号・第5号住居址	16
第10図	第1号・第2号小竪穴	18
第11図	第3号小竪穴	20
第12図	J-24特殊遺構	21
第13図	G-23・H-23グリッド 土偶・石棒・凹石出土状態	22
第14図	第5号住居址 出土土器	24
第15図	第1号住居址 出土土器	26
第16図	第2号住居址 出土土器(1)	28
第17図	第2号住居址 出土土器(2)	29
第18図	第3号住居址 出土土器(1)	31
第19図	第3号住居址 出土土器(2)	32
第20図	第4号住居址 出土土器	33
第21図	J-24特殊遺構 出土土器	34
第22図	G-23・24・26・27, H-23・24・26・27グリッド 出土土器	35
第23図	G-26・27, H-26・27グリッド 出土土器	37
第24図	遺構外出土 第1群・第2群土器	39
第25図	遺構外出土 第2群土器(1)	40
第26図	遺構外出土 第2群土器(2)	41
第27図	出土石器(1)	47

第28図	出土石器(2).....	49
第29図	出土石器(3).....	50
第30図	出土石器(4).....	51
第31図	出土石器(5).....	52
第32図	土製品（土偶）.....	53
第33図	住居址・グリッド別の出土遺物量.....	57
第34図	尖石・与助尾根・与助尾根南遺跡の住居址と炉址の分布図.....	68

表 目 次

第1表	出土石器一覧表.....	55
-----	--------------	----

写真図版目次

図版第1	1 八ヶ岳西山麓と遺跡の位置	2 発掘区全景
図版第2	1 第1号住居址	2 第1号住居址 炉址と周辺の状態
図版第3	1 第2号住居址	2 第2号住居址 炉址北側床面の配石
図版第4	1 第3号住居址	2 第3号住居址 埋甕
図版第5	1 第4号・第5号住居址	2 第1号小豎穴
図版第6	1 第2号小豎穴	2 第2号住居址炉址と第3号小豎穴
図版第7	1 J-24特殊遺構	2 G-23・H-23グリッド 凹石・石棒・土偶出土状態
図版第8	1 第1号住居址 炉址検出の状態	2 第1号住居址 炉石復元の状態
	3 第2号住居址 炉址	4 第3号住居址 炉址
	5 第1号住居址 遺物出土状態	6 第3号住居址 遺物出土状態
	7 H-23グリッド 凹石・石棒出土状態	8 G-23グリッド 土偶出土状態
図版第9	出土土器・出土石器	
図版第10	出土石器・石棒・土偶	

第Ⅰ章 調査経緯

第1節 調査にいたるまでの経過

昭和30年11月3日、茅野市豊平南大塩区内に開館された尖石考古館は、収蔵庫として建設されたもので、翌31年には事務室研究室等を備えた本館が建設されて今日に至った。

この間、尖石考古館の事業としては、昭和30年代には主として蓼科山周辺の先史器文化の発掘調査が行われた。昭和44年、県営住宅地建設のための和田遺跡発掘を契機として、以後は毎年開発に伴う記録保存を目的とした緊急発掘調査が続いた。このため、収蔵資料は年々増加し従来の施設の収蔵能力は限界に達した。加うるに駐車場が不備であったため、早くから新館の建設が望まれ、昭和48年から具体的な計画が検討されて来た。

さて、尖石遺跡と与助尾根遺跡の中間地は南大塩区有地であり、また、特別史跡区域外であったため、早くから新考古館建設候補地にあげられていた。そして、南大塩区が無償提供する意向をもっていたため、ここに新尖石考古館を建設することとなり、茅野市長と南大塩区長との間に貸借契約が締結され、国県の補助を得て、昭和53年、54年の継続事業として建設することが決定した。

この地は、昭和20年代に与助尾根遺跡の発掘が行われ、与助尾根に古代家屋が復原された際、見学道路が開設されて石閉炉址が一ヶ所発見されていた。したがって、特別史跡区域外とはいいうものの、埋蔵文化財包蔵地であり、当然、事前の発掘調査の必要が認められた。よって茅野市教育委員会では記録保存とすることとし、発掘事業の委託者として与助尾根南遺跡調査委員会を設置した。

昭和53年6月1日、茅野市長原田文也と、与助尾根南遺跡調査委員会委員長小平延門との間に委託契約を結び、調査費150万円にて事業を実施した。

現場における作業は5月29日より開始されたが、茅野市運動公園内の下ノ原遺跡発掘のため7月8日にいったん打切られ、8月23日に再開して9月2日に終了した。

第2節 発掘調査の経過

考古館建設敷地は、そのほぼ中央を南北に幅約3mの与助尾根遺跡見学道路が通じ、路の両

側は山林であるが、かつては畠として利用されたこともあるようである。面積は3124m²である。見学路は昭和25年頃開設されたが、このとき石匂炉址が発見されている。工事が青年会員により行われたため、住居址の確認がなされずに工事が進められたものであろう。発掘は見学路とほぼ平行に、敷地の東縁に南北の基線を設定し、南より2m毎にA～Vとし、これに直交する東西線は1～28の整数を付し2m×2mのグリッドを設定した。そして4m×4mの4グリッドを単位発掘区とし、2m間隔で発掘区を設定した。

6月から開始した発掘作業は、7月8日にいったん中止して下ノ原遺跡の発掘に移った。この間に見学路東側の敷地の調査を終了し、小窓穴2基と第1号住居址を完掘した。そして西側敷地において第2号、第3号住居址の存在を確認したが完掘には至らなかった。

考古館建設工事の日取りが具体化し、8月21日から発掘を再開して第2号、第3号住居址を完掘して8月28日に現場における作業を終了した。9月27日起工式が行われて工事が開始されたが、たまたま敷地の東北端に配水管埋設のための溝を掘削したところ、石匂炉を半分削り取り住居址が発見された。この住居址は、縄文前期住居址に重複して構築されたもので、これを第4・第5号住居址として、翌昭和54年3月に調査を行った。

発掘調査から考古館開館までの日誌（抄）

昭和53年5月29日（月）～6月3日（土）発掘区の立木の伐採と整理作業。

6月 5日（月） 発掘作業開始。

6月 6日（火） 与助尾根南遺跡調査委員会を開催し、発掘現場を視察する。G-11・12、H-8・9・11・12、I-7・8グリッドに耕作による擾乱溝発見。

6月 9日（金） 第1号小窓穴発見。

6月 10日（土） 第1号住居址発見。

6月 14日（水） 横浜国立大学河合正一教授敷地現場視察。

6月 17日（土） 第2号住居址発見。

6月 22日（木） 第3号住居址発見。

6月 26日（月） J-24特殊遺構発見。G-23・H-23グリッドより土偶・石棒出土。

6月 29日（木） 下ノ原遺跡調査委員会を開催。

6月 30日（金） 文化庁水野正好氏、県教委文化課丸山敏一郎氏視察。

8月 23日（水） 与助尾根南遺跡の発掘を再開する。

8月 30日（水） 与助尾根南遺跡の発掘終了。

9月 27日（水） 尖石考古館起工式。

11月 28日（火） 工事により第4号住居址を発見。

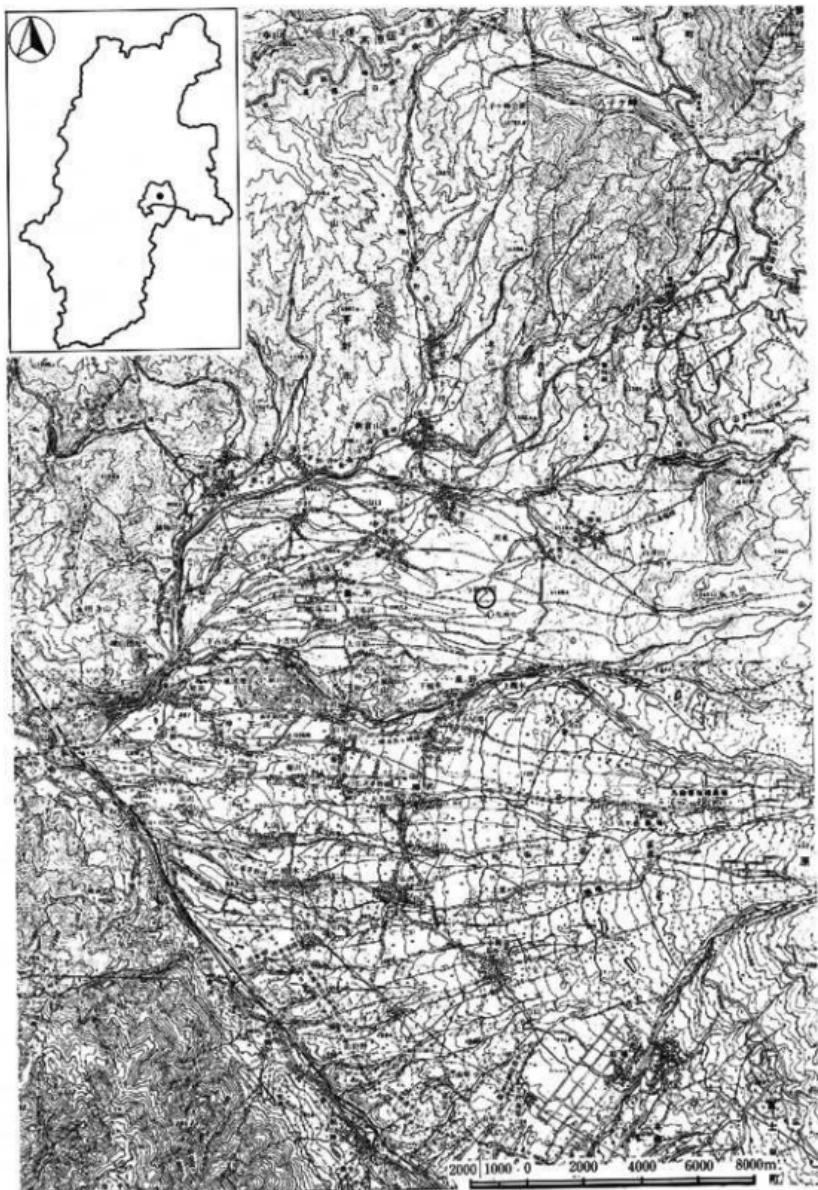
12月 21日（木） 与助尾根南遺跡調査委員会開催。

昭和54年1月 10日（水） 新考古館の上棟式挙行。

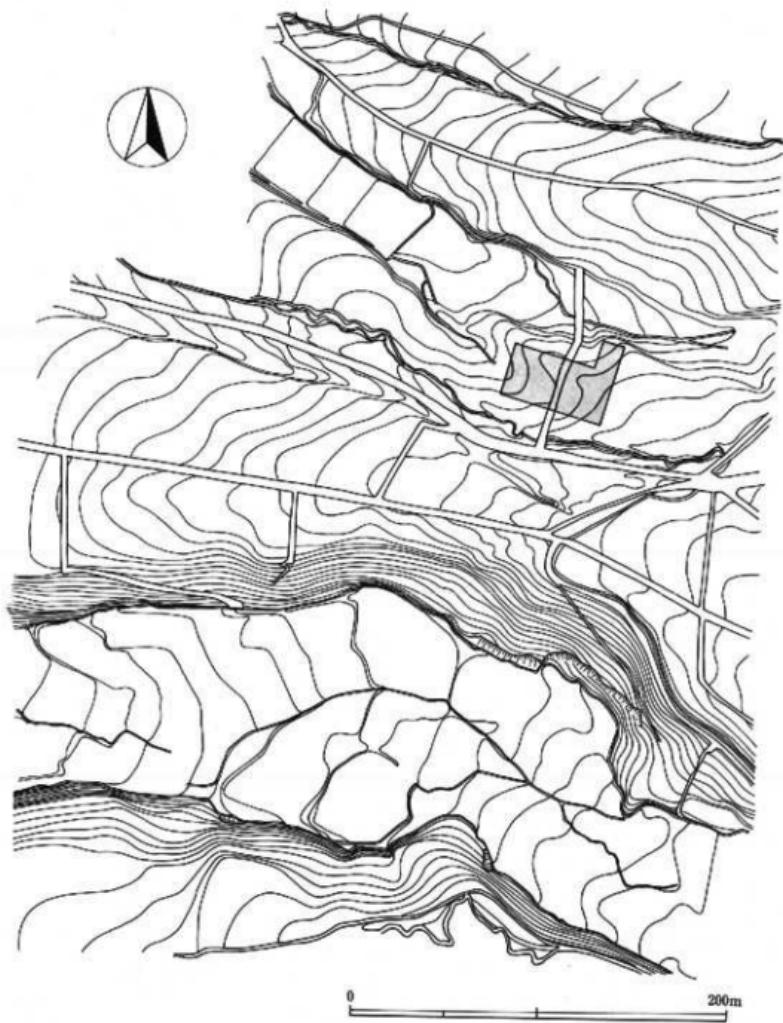
3月 14日（水）～17日（土） 第4号・第5号住居址発掘調査。

7月 4日（水） 新考古館開館式挙行。

（宮坂虎次）



第1図 遺跡位置図 (1/100,000)



第2図 遺跡周辺の地形と発掘区 (1/3,000)

第II章 遺跡概観

第1節 立地および地理的環境

八ヶ岳西山麓に展開する広大な裾野は、八ヶ岳火山活動による火碎流や、ローム、泥炭層の厚い堆積により形成され、上部を御岳、乗鞍火山起源による新期風成ロームが覆っている。

この裾野は八ヶ岳美濃戸山中の火口瀬を水源とする柳川渓谷により南北に区分され、柳川から、蓼科山を水源とする滝之湯川までの幅4~6kmの一帯は北山浦と呼ばれている。北山浦はコンセクエントリバーにより更に数条の東西に長い台地に区分され、台地の基部は幅広く、葉身部から末葉部にかけては次第に複雑に分岐し、その先端は舌状を呈し、上川沖積面に達しておわる。これら台地上には北山、湖東、豊平の各部落が立地するが、また縄文時代の遺跡も濃厚に分布する区域である。尖石遺跡はこれら遺跡群の中では標高の高い位置に立地し、遺跡の占める台地の幅も広い。この尖石遺跡台地の北縁に与助尾根南遺跡が位置する。

尖石遺跡台地は南北の幅130mで、その北縁に幅30m比高3mの浅い渓をへだてた台地に与助尾根遺跡が立地する。与助尾根台地は湧水により形成された浅い湿地状の谷により、尖石台地より分岐した舌状小台地である。これら湧水の一つが尖石台地の北縁にあり、湧水の作用による浅い凹地が、斜めに与助尾根の湿地に達している。この凹地と与助尾根の谷にはさまれた狭少の部分が今回発掘調査された区域である。かつて開墾されて畠となっていたこともあり、地表では湧水は観察されなかったが、凹地を掘り下げたところ160cmでローム層に達し、漣々と水が湧き出して溜った。

第2節 歴史的環境

大正十四年、諏訪教育会より刊行された諏訪史第一巻に、尖石遺跡は諏訪郡内主要遺跡12ヶ所の中に採録され、「この遺跡は蓋し南方立沢と対立して一中心をなす高位遺跡であろう」と述べられている。¹³

遺跡一帯は森林原野であったが、養蚕が盛んとなり、明治25・26年頃に桑畠にするため、南

註 (1) 烏居龍藏 1924 『諏訪史第一巻』信濃教育会諏訪部会

大塙区有地であったものを分割し、個人所有として開墾した。開墾当時、多数の遺物が出土したが崇りを恐れて捨てられたと伝えられる。このことから、小平小平治が明治27年、「人類学雑誌」に報告したのを嚆矢とする。その後の尖石・与助尾根遺跡の調査の経過は次のとおりである。

- 大正11年 八幡一郎氏尖石遺跡試掘
- 〃 宮坂春三氏尖石遺跡にて土偶を発見（この土偶について八幡一郎氏「人類学雑誌37号の8」に発表）
- 大正12年 調訪教育会地方委員、諏訪史第一巻編纂のため発掘
- 昭和4年 伏見博英氏 尖石遺跡発掘
- 昭和5年 地番2906号の桑畠改植中に多量の遺物発見
- 〃 今井広亀氏林道より石圓炉址2基を発見
- 〃 宮坂英式氏林道より土器を包藏せる石圓炉を発見
- 昭和8年 林道の拡張工事に先立ち石圓炉と兎形の蛇体把手付土器を発見
- 〃 8月 長野県保存史跡に指定
- 昭和10年5月 与助尾根台地を開墾して石圓炉址を発見
- 昭和12年 尖石台地3430番地より石圓炉址を発見
- 昭和14年 小平喜代士氏尖石台地の南の溪の開田に際し多量の遺物を発見
- 昭和15年 尖石遺跡の発掘調査が開始され、第1号～第16号住居址を発掘
- 昭和16年 尖石遺跡第17号～第20号住居址を発掘
- 昭和17年 尖石遺跡第21号～第32号住居址を発掘
- 〃 9月23日 文部省の史跡保存地に指定「史跡 尖石石器時代遺跡」
- 昭和21年 与助尾根遺跡の発掘調査が開始され、第1号、第2号住居址を発掘
- 昭和22年 与助尾根遺跡第3号、第4号、第5号住居址を発掘
- 昭和23年 与助尾根第6号住居址を発掘
- 昭和24年 与助尾根第7号～第16号住居址を発掘

註(1) 小平小平治 1893 「長野県下佐久郡古墳及諏訪郡石器時代遺物」『人類学雑誌』第9卷 第9号

(2) 八幡一郎 1895 「信濃諏訪郡豊平村広見発見の土偶」『人類学雑誌』第37卷第8号

(3) 今井真樹 1933 「豊平村尖石遺跡」『長野県史跡名勝天然記念物調査報告』第16輯

昭和25年 与助尾根第17号～第22号住居址を発掘

リ 7月 尖石、与助尾根の中間尾根に与助尾根見学道路を開設し、石圓炉址一ヶ所を発見（与助尾根南遺跡）

昭和27年 与助尾根第23号～第28号住居址を発掘

昭和28年 7月27日 尖石遺跡 特別史跡に指定

昭和29年 尖石遺跡第33号住居址を発掘

昭和15年に始まった尖石遺跡の調査は昭和17年をもって打切られ、昭和29年の発掘による住居址を加えて、繩文中期竪穴住居址33基と竪穴群、列石群を調査したが、遺跡全面積からみると、その一部に過ぎない。また、この他発見された炉址が50ヶ所を数える。史跡指定面積は42227m²で、なお、多くの遺構が埋蔵されているものと推定される。

与助尾根遺跡の発掘は、戦後の昭和21年から昭和27年にかけて行われ、中期の竪穴住居址28基が調査されたが、台地頂部から北側の部分が未調査区となっており、小竪穴等が埋蔵されている可能性が多い。

尖石台地南には、溪をへだてて、同規模の長峯状台地に、繩文中期から後期に及ぶ新水掛遺跡⁽¹⁾が位置する。小規模の調査が行われたが、地形等から尖石遺跡に次ぐ大集落址と推定される。この遺跡周辺には金堀場、鴨田等の小規模遺跡が分布する。

尖石遺跡と同台地の西方約2kmに、立石、中ツ原遺跡⁽²⁾があるが、いずれも小規模のものである。

尖石遺跡の北3.5kmの尖石とほぼ同標高の長峯遺跡⁽³⁾は、開田事業により充分な調査が行われずに煙滅したが、出土品には見るべきものが多い。

これら八ヶ岳西山麓の遺跡の分布状態を概観すれば、柳川以西の北山浦において、大集落遺跡は尖石遺跡が最も標高の高いところに位置する。

（宮坂虎次）

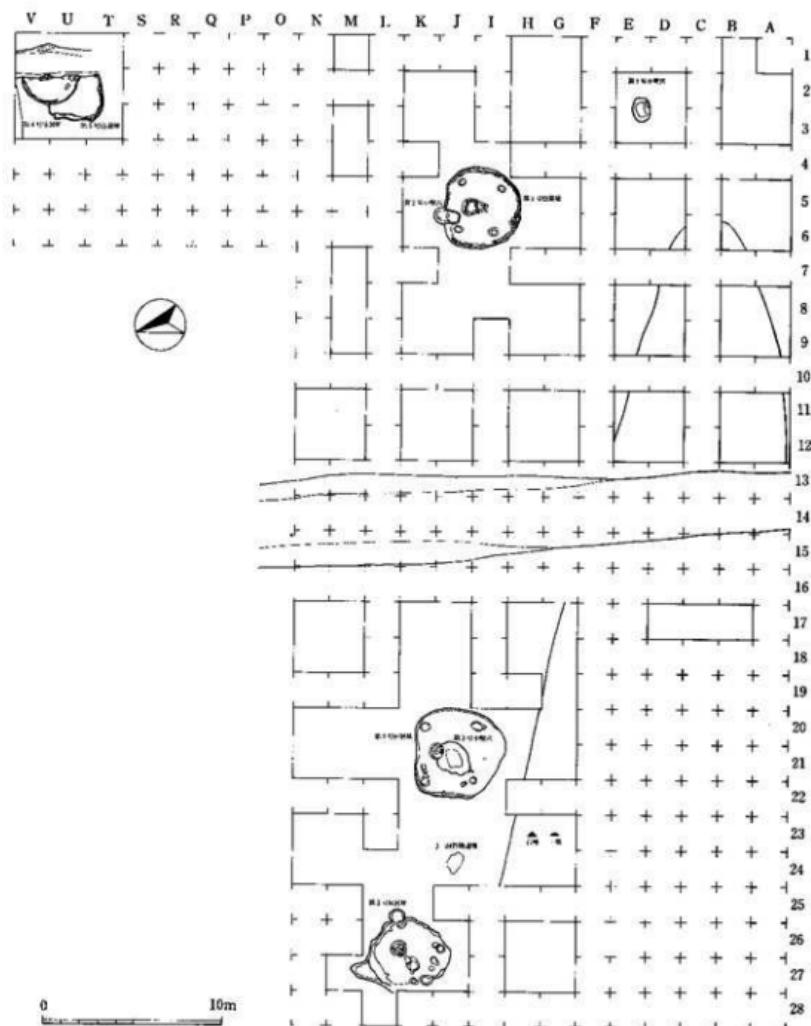
註（1） 宮坂英式 1937 「信濃国諏訪郡上場沢の遺跡」『中部考古学会叢報』第2年第6報

宮坂英式 1938 「八ヶ岳山麓の土偶報告」『ひだびと』第6巻第11号

宮坂英式 1939 「八ヶ岳山麓出土の土偶」『ひだびと』第7巻第1号

（2） 宮坂英式 1955 「長野県諏訪郡中原遺跡」『日本考古学年報』3

（3） 宮坂英式 1964 「長野県茅野市長峯遺跡」『日本考古学年報』12



第3図 発掘区内造構分布図 (1/320)

第三章 遺構

発掘区内から発見された遺構は、竪穴住居址 5 基（内、縄文時代前期 1 基・縄文時代中期 4 基）、小竪穴 3 基、特殊遺構 1 であり、この他に特殊な遺物を出土した G-23・H-23 グリッドがある。また、昭和 25 年に、今回の発掘区の J・K・L-14 列辺に縄文時代中期とみられる石圓炉址が発見されているため、発掘区内には今回新たに発見された住居址を含め、縄文時代中期の住居址は 5 基存在していたことになる。

以下、順を追って発見された遺構についての説明を記す。

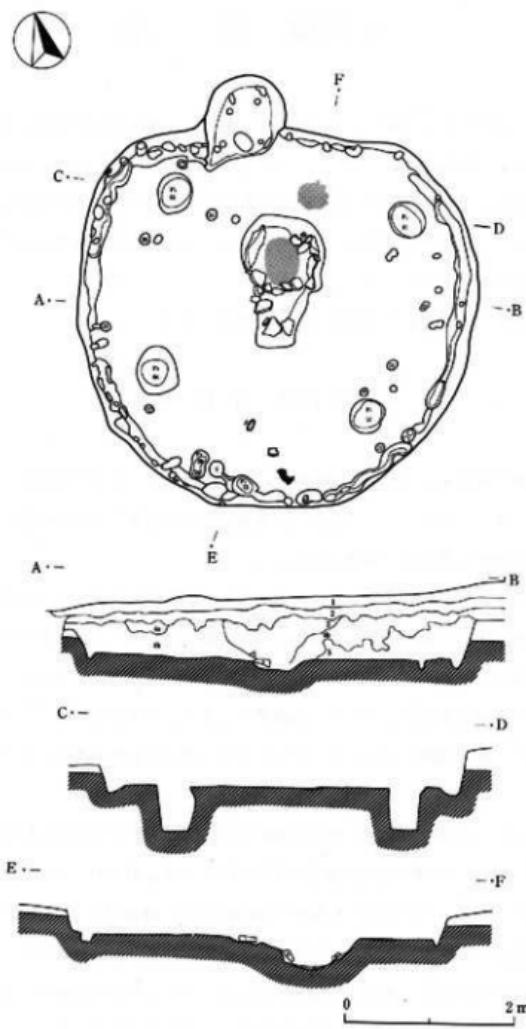
第 1 節 住居址

第 1 号住居址（第 4・5・6 図、図版第二-1・2、第八-1・2・5）

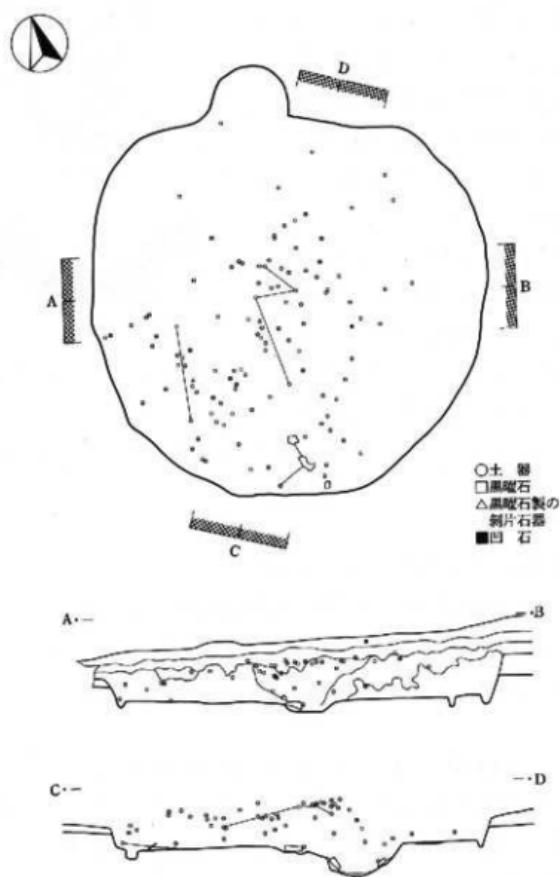
発掘区東側、I-5・6 グリッドを中心に発見された住居址であり、尾根の背の部分から緩く南に傾斜する地形の移行部に構築されている。

覆土は表土を入れて 5 層に観察された。第 1 層は木の根等が多量には入る表土層、第 2 層は炭化物を含む黒色土で住居中央部に堆積している。第 3 層はロームの小粒子・炭化物を含む黒褐色土、第 4 層はロームのブロック・炭化物を含む黄褐色土であり、4a 層は 4b 層よりも若干黒色が強い。第 5 層は第 4 層よりも硬い黄褐色土であり、炭化物とロームのブロックを含んでいる。このうち、特に壁際に認められるロームブロックは比較的大きく、また量も多く含まれている。

住居址の平面形は、北壁と南壁の一部が直線的な在り方を呈する不整な隅丸方形である。規模は 450 cm × 470 cm であり、深さ 50 cm ほどの P₁～P₄ の 4 本主柱の柱穴が場面的に配されている。壁は褐色土中からの掘り込みを観察でき、東壁で 46 cm 南壁で 10 cm ほどと東北壁が高く南西壁は低い。壁下には周溝がめぐり、周溝内には小ピットの穿たれている部分もある。床は水平で堅く、炉址の北側で第 2 号小竪穴と重複する部分には、ロームによる厚さ 6 cm ほどの張床がなされている。住居出入口部は南西部にあり、P₅・P₆ は出入口部に関する施設とみられる。埋甕は発見されなかった。炉址は中央やや北寄りに位置し、床を 40 cm ほど掘り込んで炉床としている。炉石は西側の一枚石の他は比較的小振の礫をいくつか据えている。また、北側に据えられていた炉



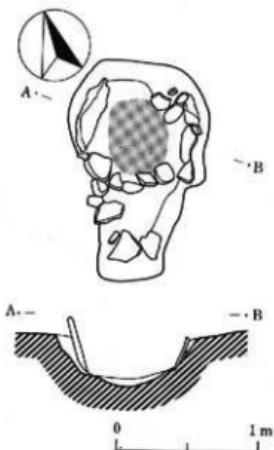
第4図 第1号住居址 (1/60)



第5図 第1号住居址出土遺物分布図

石は取り外されており、西側の炉石の上に置き重ねられていた。炉址の南側には炉址と統く深さ10cmほどの略矩形の掘り方があり、掘り方内の西側と南側には扁平な礫が配されている。掘り方内からは黒曜石が一片出土したのみであり、焼土はみられなかった。 P_1 と P_4 の中間位の炉址と奥壁間に32cm×38cmほどの大きさで床が厚さ2cmほど円形に焼けている。この焼土内、及びその周辺の床面からは遺物はなにも出土しなかった。

遺物は第15図10が南側床面より、第15図12が南壁下周溝内、第15図15が炉址内より出土した。その他の遺物はほとんどが住居中央部から南西側にかけての覆土中より出土した。特に住居中央部では第3層上部から第2層下部に集中して出土しており、中には接合関係もみられる。住居東側と北側では遺物はごくわずかしか出土していないが、これは遺物を含まない第5層が地形の影響により強く形成されたためであろう。



第6図 第1号住居址炉址 (1/40)

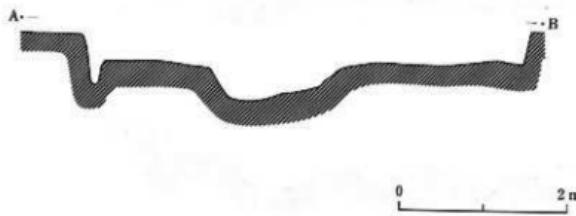
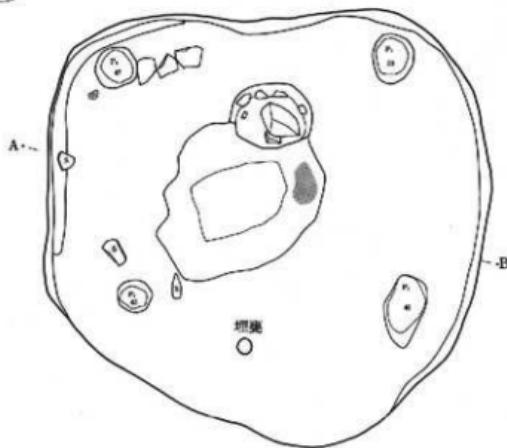
(鶴見幸雄)

第2号住居址 (第7図、図版第三-1・2、第八-3)

本住居址は、第3号住居址の東7mの、僅か南に緩傾斜する位置に構築されている。規模は5.1m×5.24mの不整開丸方形のプランである。壁は東・北・西の三方にめぐり壁高は北側35cm～40cmで、勾配に即して次第に低くなり南壁を欠く。周溝は西壁にそ一部にのみ検出された。

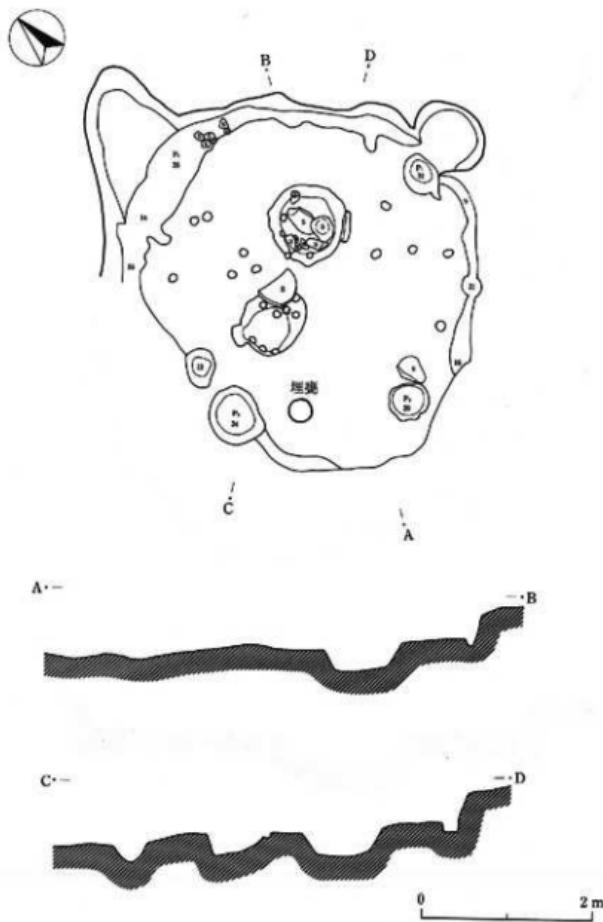
床面は平でかたく叩きかためられている。 P_1 ・ P_2 ・ P_3 ・ P_4 の4主柱址で、深さは40cm～50cmを計る。入口部に底部を抜いた正位の埋甕 (第16図27) があり、胴上過半分を欠損する。全体の器形文様が不明であるが、曾利III式に比定されるものと思われる。 P_4 の柱址に接して3個の平な石が遺存する。

炉は炉石が撤去されて、径80cm×90cm、深さ30cmの竪穴として残り、内部に赤く焼けた大石が転落遺存する。炉竪穴の南に接して第3号小竪穴があり、この上に張り床をして住居址床面を構築しているところから、第3号小竪穴は住居址構築前に掘られた竪穴であろう。北壁付近の堆土は赤土塊の混じた二次的のもので、このため北壁の検出が明確でない部分があった。



0 1 2 m

第7圖 第2號住居址 (1/60)



第8図 第3号住居址 (1/60)

北壁に接して第16図25・26・28が出土した。

第3号住居址（第8図、図版第四-1・2、第八-4・6）

本住居址は発掘区の西端に位置し、隣地との境界で完掘できなかったが、住居址床面より黒土が深く落ち込んでいた。規模は南北の径4.3m、東西の径は西壁が確認できなかったので明確ではないが4.4mほどと思われ、隅丸方形のプランと推定される。壁は北及び東部分をめぐり、稍々傾斜して壁高35cm前後を測る。

周溝は壁に沿って検出され、西から南部分は壁を欠き、周溝も検出できなかった。北部分の周溝は幅広く50cm～55cmで、深さも28cmと他の部分より深く、主柱址の位置と一致するのでそのためと推定される。

床面は北半分はロームを叩き固めて堅く、南半分は傾斜面に即して張床とし、凹凸も多く軟弱である。張床面より下位に埋甕が正位で遺存した。埋甕（第18図57）は僅かに口縁部を欠損する完形深鉢で、繩文中期後葉曾利III式に比定されるものである。

住居址の北壁及び東壁には切り込むような形に竪穴状の遺構がある。北壁の竪穴状遺構は底面や壁の状態からみて遺構であるとはみなし得なかった。東壁の竪穴は円形を呈して、底部は住居址床面とほぼ同一レベルである。本住居址に付属する施設と思われる。

炉は住居址中央より奥壁寄りに位置し、径90cm、深さ34cmの円形の竪穴として遺存し、炉石が一個のみ原位置にあり、また炉穴内に不規則に石が集積して中から凹石（第29図9）が出土した。炉の西側に椭円形の浅い竪穴があり底部には小孔が穿たれていた。

柱穴はP₁・P₂・P₃が検出され、P₄は北壁に接した深い周溝部分と推定され、4主柱址である。このP₄に接した周溝上に6個の小砾が集石しており、うち2個は凹石であった（第28図7・第29図10）。

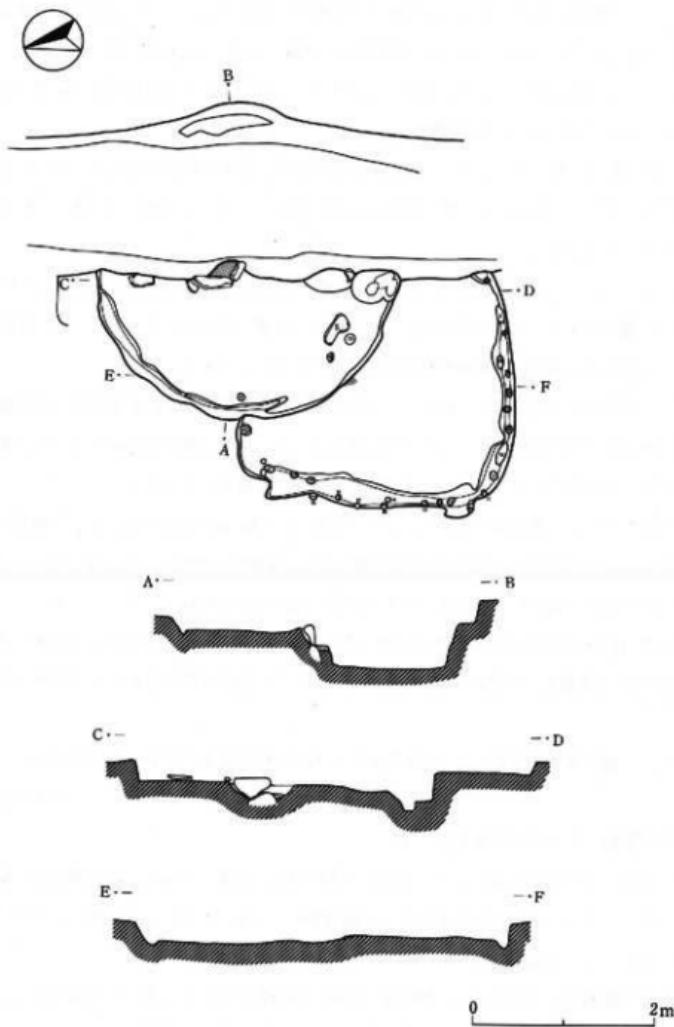
赤色塗彩土器（第18図60）が炉の東覆土中より、P₁柱址内より第18図59が出土した。

（宮坂虎次）

第4号住居址（第9図、図版第五-1）

本址は遺構の存在が予測されなかつた尾根の北側肩部に位置しており、排水溝掘削工事により発見された。そのため住居址は1/2ほどが破壊されている。したがって住居址のプラン等は残存する部分によって推定した。

住居址の平面形態は円形を呈し、330cm×350cmの規模を有する。主柱穴は発見されず、出入口部に関わると思われるごく浅いP₁が発見されたのみであった。炉址は中央よりやや北へ寄った位置に設けられている。炉の掘り方はほぼ80cm×80cmの大きさで、深さは25cmほどある。



第9図 第4号・第5号住居址 (1/60)

掘り方内には 50 cm × 60 cm ほどの方形石壠が構築されていたものと思われる。現存する炉石は西辺と南辺のものであり、工夫の話では北側には炉石があったが東側にはなかったとのことであった。焼土は炉址内のほぼ中央部に残存しており、焼土混りの褐色土が焼土を覆っている。炉址と奥壁間には床面に接して扁平な礫が遺存していた。壁は南側で 6 cm ほどの高さがあり、北側で 22 cm、東側で 24 cm ほどの高さがある。周溝は北西壁下に設けられており、床面は堅敵である。

遺物は第 20 図 75 と若干の土器片、それに石鎌・凹石が覆土中より出土した。住居址の廃絶された時期は覆土中より出土した土器からみて曾利 III 期であろう。

本住居址は、比較的規模も小さく主柱穴を有しない点などからみて、本遺跡においては特殊な要素を持つ住居址であると考えられる。

第 5 号住居址（第 9 図、図版第五一）

本址は第 4 号住居址の西側プランの検出を進めて行く過程で存在が明らかになった住居址である。住居址の北東部は第 4 号住居址と重複しており、東側は排水溝により削り取られている。

住居址の平面形態は隅丸方形であり、規模は 260 cm × 304 cm ほどになるものと思われる。主柱穴は発見できなかった。出入口部は炉址と壁の位置関係からみて南東方向にあるものと思われる。炉址は中央やや北へ寄って設けられた小さな地床炉であり、4 cm ほどの厚さに焼土が堆積している。壁は南壁が 20 cm ほどの高さを有し、深さ 9 cm ほどの壁柱穴を斜位に設けている。西壁は 15 cm ほどと低く、やはり壁柱穴を斜位に設けている。周溝は南壁下と西壁下に設けられており、北壁下には設けられていない。周溝は西壁下のものが南壁下のものより 15 cm ほど広い。床面は軟弱で若干の凹凸がある。

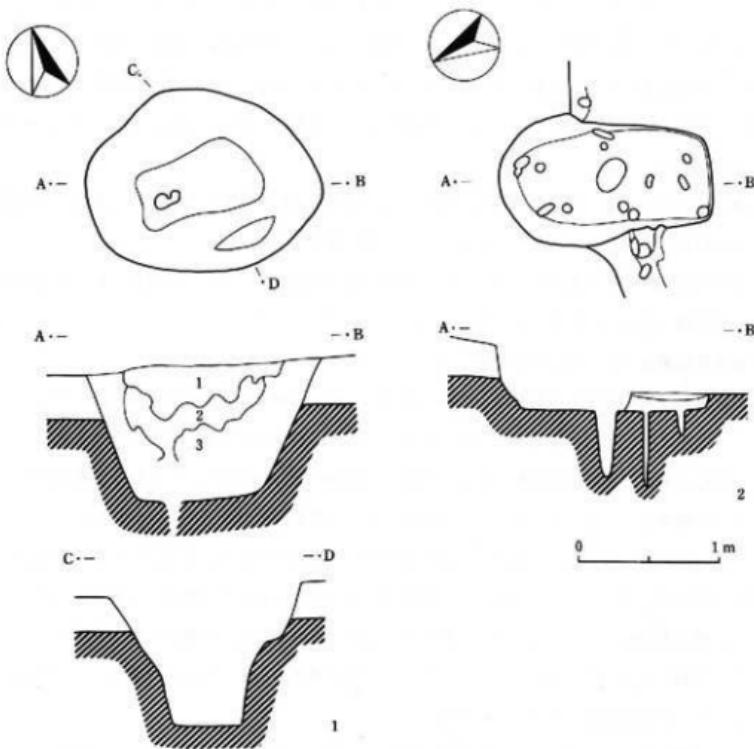
出土遺物は少なく、覆土中より若干の土器片と石鎌。それに西側の周溝内から磨製石斧が一点出土した。本址の時期は覆土中の土器や住居址の形態からみて、前期前葉に位置するものと考えて大過ないであろう。

(守矢昌文)

第 2 節 小竪穴

第 1 号小竪穴（第 10 図 - 1、図版第五 - 2）

発掘区東南隅、E-2・3 グリッドより発見された。小竪穴付近は小竪穴の西側に発達した谷の頂部へ向って地形が傾斜しているため、小竪穴のローム壁高は東側が高くなっている。



第10図 第1号・2号小窓穴 (1/40)

小窓穴の長軸方向は N 87°E である。開口部は 168 cm × 120 cm の不整橿円形を呈し、底面は 88 cm × 42 cm の不整な長方形を呈する。褐色土中のプラン確認面から底面までの深さは 98 cm ほどあり、ローム面からの深さは約 70 cm ほどある。長軸方向での断面形は鍋底状を呈しており、北壁と南壁は中程に段を有し、また南壁中には平坦な面が設けられている。底面には中央より西に寄った位置に連結する小ピットが 2 個設けられているが、湧水が激しく発掘できなかった。

小窓穴内の覆土は 3 層に分かれる。壁と底面を厚く覆っている 1 cm 大のロームブロックを含

む硬い黄褐色土（第3層）は、壁際では特に東側に厚く形成されている。中央部はロームの小ブロックや粒子を含む褐色土（第2層）と黒褐色土（第1層）が覆っており、覆土の堆積状態は自然堆積を示すものであった。

第2号小豊穴（第10図-2、図版第六-1）

J-6グリッドを中心とした尾根の背の平坦な部分に位置し、第1号住居址と重複して発見された。

小豊穴の長軸方向はN 28°Eである。壁の南半分は第1号住居址によって切り取られているため開口部の形態や規模は不明であるが、おそらく小判形にちかい圓丸長方形を呈していたものと考えられる。開口部の現存値は152cm×96cmである。底面形は不整な圓丸長方形を呈し水平な床にはいくつかの小ピットが穿たれている。ピットは中央に26cm×18cm、深さ46cmの比較的大きめなものを配し、その周辺に小型なものをいくつか配している。掘り込みは褐色土中で確認でき、北側での確認面からの深さは44cmほどあり、壁は若干丸味をもって立ち上がっている。住居と重複する部分の張床の下には黄褐色土が小豊穴の底面を覆っていた。

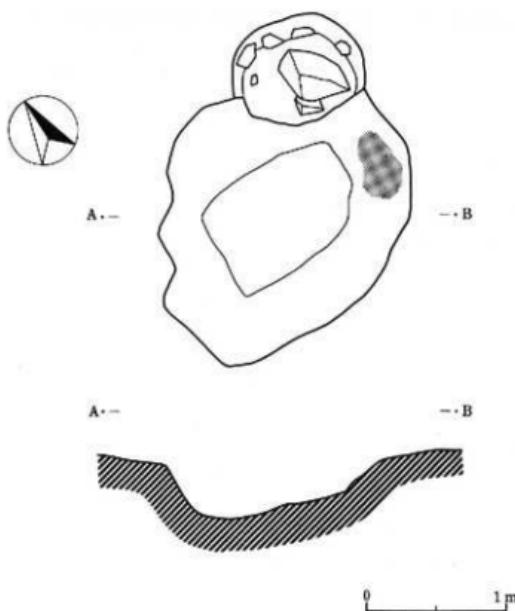
（鶴飼幸雄）

第3号小竪穴（第11図、図版第六-2）

第2号住居址床面のほぼ中央に位置する。この竪穴の上に張床して住居址の床面が作られていた。住居址の炉を検出中、南側が次第に深くひろがり、かつ、張床の存在から住居址構築以前に掘り込まれた竪穴であることが判明した。平面形は、長径2.40m、短径1.45mの不整形で、北東壁を切って住居址の炉穴が掘り込まれている。住居址床面からの深さは43cmを計る。壁は外傾するが、東壁は緩傾斜しつつ底部に達し、底部は平でない。

東壁の一部に焼土が検出された。

(宮坂虎次)

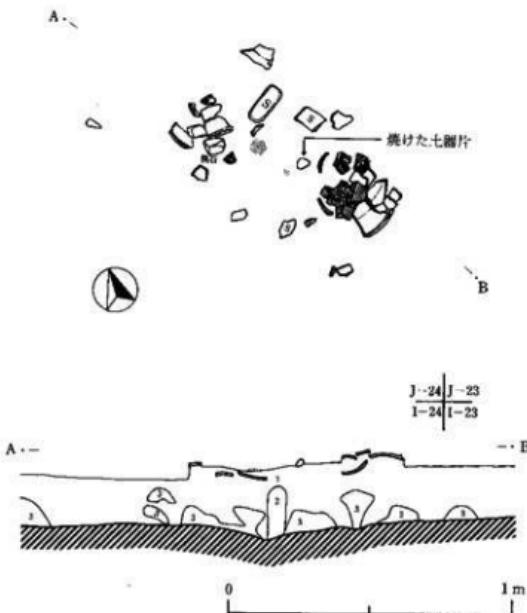


第11図 第3号小竪穴 (1/40)

第3節 その他の遺構

J-24特殊遺構 (第12図, 図版第七-1)

発掘区西側、第2号住居址と第3号住居址の中間にあたるJ-24グリッドより発見された。遺構は谷に向って緩く傾斜して行く地形の、ローム面より20cmほど上位の、ロームの小ブロックや粒子を含む褐色土(第1層)中に設けられている。遺構を構成する遺物等は一括土器・土器片・焼けた土器片・焼石・焼土・礫である。これらの遺物等は80cm×60cmの範囲で、上下10cmのレベル差内にまとまりをもって遺存している。遺構発見面での掘り方や下部施設は認められなかつたが、遺物が集中している部分の遺物を含む褐色土中には、小さな炭化物が比較的多く認められた。遺構下のローム面は木の根等の搅乱(第2層)による凹凸が著しく、



第12図 J-24特殊遺構 (1/20)

ロームがブロック状をなして褐色土中に浮上している（第3層）。

第21図82は底部と口縁を半分ほど欠損し、口縁を東南方向に向け壊れた状態で出土した。

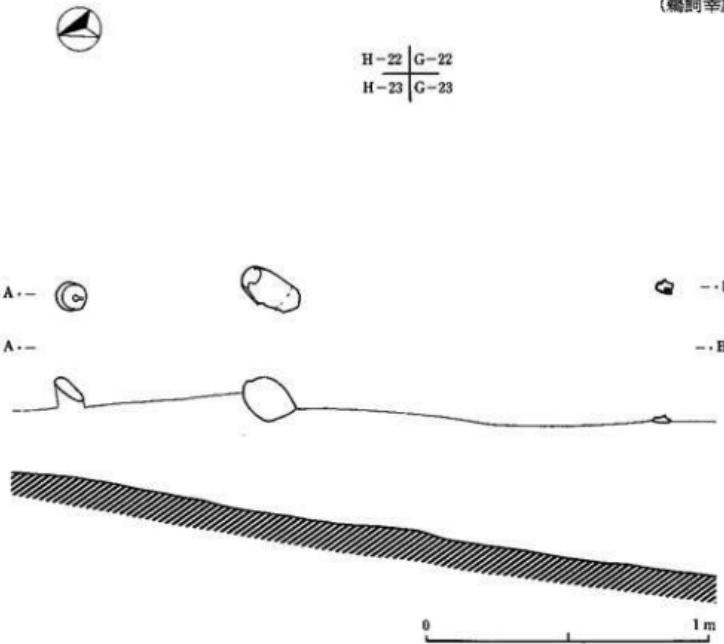
G-23・H-23グリッド（第13図、図版第七-2、第八-7・8）

G-23・H-23グリッドは発掘区西側の尾根の南側の緩やかな傾斜面に位置している。G-23グリッド東壁面では表土（25cm）・黒色土（8cm）・褐色土（48cm）・黄褐色土（6cm）・地山の順に土層が観察され、遺物は褐色土の中程から上位に包含されている。石棒（第31図）・土偶（第32図）・凹石（第28図4）も褐色土中に遺存しており、周辺からは土器片が散発的に出土した。

石棒は頭部を東北方向に向けており、土偶は石棒から南へ130cm離れた位置で背を上にして出土した。凹石は石棒から北へ60cm離れており、三者はほぼ同レベルにある。

包含層の土器片は曾利II～III式のものであり、若干曾利III式のものが多い。石棒・土偶・凹石は曾利II～III式期に、同一の目的と行為のもとに廃棄されたものと思われる。

（鶴岡幸雄）



第13図 G-23・H-23グリッド土偶・石棒・凹石出土状態 (1/20)

第IV章 遺 物

第1節 土 器

発掘区より出土した土器は整理箱にして3箱分ほどの量であり、わずかな資料を除いてほとんどが縄文時代中期後半の土器群である。中期後半の土器群は大半が破片による資料であり、堅穴住居址を4基調査した割には完形及び復元実測可能なものは比較的少なかった。それ故、個々の資料においては細かな型式認定に不能を来たすものもあるため、型式の枠を越え、とりあえず文様の系統別に分類を試みることとする。

以下、各群を追って遺構別に出土した土器の説明を記す。

1 第1群土器

縄文時代中期後半以前の土器。

(1) 第1類 (第24図142)

胎土に細粒を多く含む比較的薄手の焼きの良い土器である。施文は横方向に行われており、山形の頂部は若干の丸味をもっている。隣接する与助尾根でも稍円押型文⁽¹⁾が1片出土しており本例も同様に細久保段階のものと思われる。

(2) 第2類 (第14図)

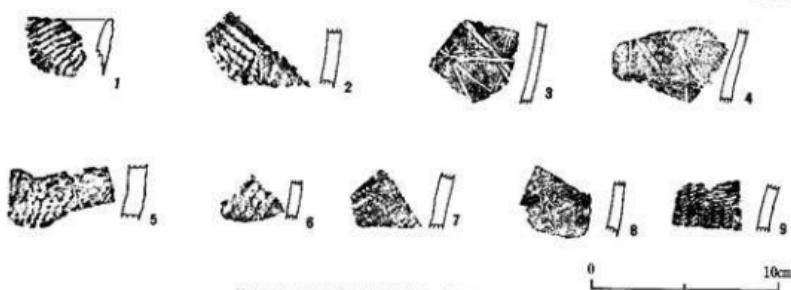
第5号住居址より出土した一群である。胎土中に纖維を含有するものと含まないものがある。

A種a(1・2) 胎土中に纖維を含有するもので縄文の施文されたもの。1は胎土中に白色不透明な小粒子を多く含む。口唇部は角張らずに丸味をもち、L縄文が施文されている。2はRLとLR縄文からなる羽状縄文。1・2共に内面が調整されており、特に2は丹念に行われている。

A種b(3・4) 胎土中に纖維を有しないもので半截竹管により施文したもの。3・4は同一個体であり、胎土中に白色不透明の粒子を含む比較的薄手の土器であり、器内面には若干の凹凸が認められる。口縁にちかい部分であると思われ、浅く不鮮明な沈線で格子目状に文様が構成されている。

註(1) 戸沢充則 1950「与助尾根発見の新資料」『史実誌』第4号

B種（5～9） 胎土中に纖維を有しないもので縄文が施文されたもの。5は焼きの良い中厚手の土器であり、器内面には凹凸が認められる。原体の末端を自繩自縛したLR縄文が施文



第14図 第5号住居址出土土器 (1/3)

されている。6・7はLRと思われる斜縄文で、器内面には若干の凹凸が認められる。8は捺糸圧痕。9は胎土中に雲母を有する焼きの良い土器で縄文は縱走する。

(3) 第3類 (第24図143)

新道式の深鉢形土器の胴部破片である。胴部の横帯区画文とその中に構成される横円区画文の部分であり、隆帯の脇にはヘラ状工具による幅広な連続刺突文が加えられている。

2 第2群土器

中期後半の土器群であり、地文及び主文様の在り方から3類に分かたれる。

(1) 第1類

沈線文を地文及び主文様とするもの。

A 沈線を地文として隆帯を伴うもの。隆帯の在り方からさらに3分される。

A-a 断面がカマボコ状を呈する貼り付けられたのみの隆帯。隆帯の脇は調整されない。深鉢形土器の頭部に横位に配されるものや、胴部に懸垂文として配される場合が多い。

A-b 断面がカマボコ状を呈する比較的背の高い調整された隆帯で、隆帯の脇には多くが調整時に加えられる沈線を有している。頭部が括れて口縁が開く深鉢形土器の、口縁が無文のものと区画文による文様帶をもつものに多くみられる。

A-c 断面が扁平な台形を呈する比較的背の低い幅広な調整の加えられた隆帯である。調整時に隆帯の脇に加えられるなぞりにより、隆帯の脇には比較的幅広く浅い沈線が形成される場合が多い。口縁部に文様帶をもつものとともに深鉢形土器に多くみられる。

A-d 比較的背の高い調整されたbと同じ隆帯をもつ。中にはbよりも頂部の尖る隆帯をもつものもあり、刺突文等を伴うものもある。胴部が直線的に開き、口縁の内湾する深鉢形土

器に多い。

- B 沈線による地文の他に別の沈線文が組み合わさるもの。
B-a 懸垂文をもつもの。
B-b 沈線による区画文をもつもの。
B-c 脊部に弧線文をもつもの。
B-d その他の沈線が伴うもの。
C 沈線のみのもの。これには条線状沈線を有するものと綾杉状沈線を有するもの、それに列点文や刺突文を有するグループがある。中でも条線状沈線や綾杉状沈線文をもつものは、その施文具によりさらに分類される。

- C-a 半截竹管状工具によるもの。
C-b 櫛刃状工具によるもの。
C-c ヘラ状工具によるもの。
C-d 列点文・刺突文を有するもの。
D 沈線による地文を有しないもの。

(2) 第2類

縄文及び燃糸文を地文とするもの。

- A 隆帯を伴うもの。
B 沈線を伴うもの。
C 磨消縄文のあるもの。
D 繩文のみのもの。
E 燃糸文のもの。

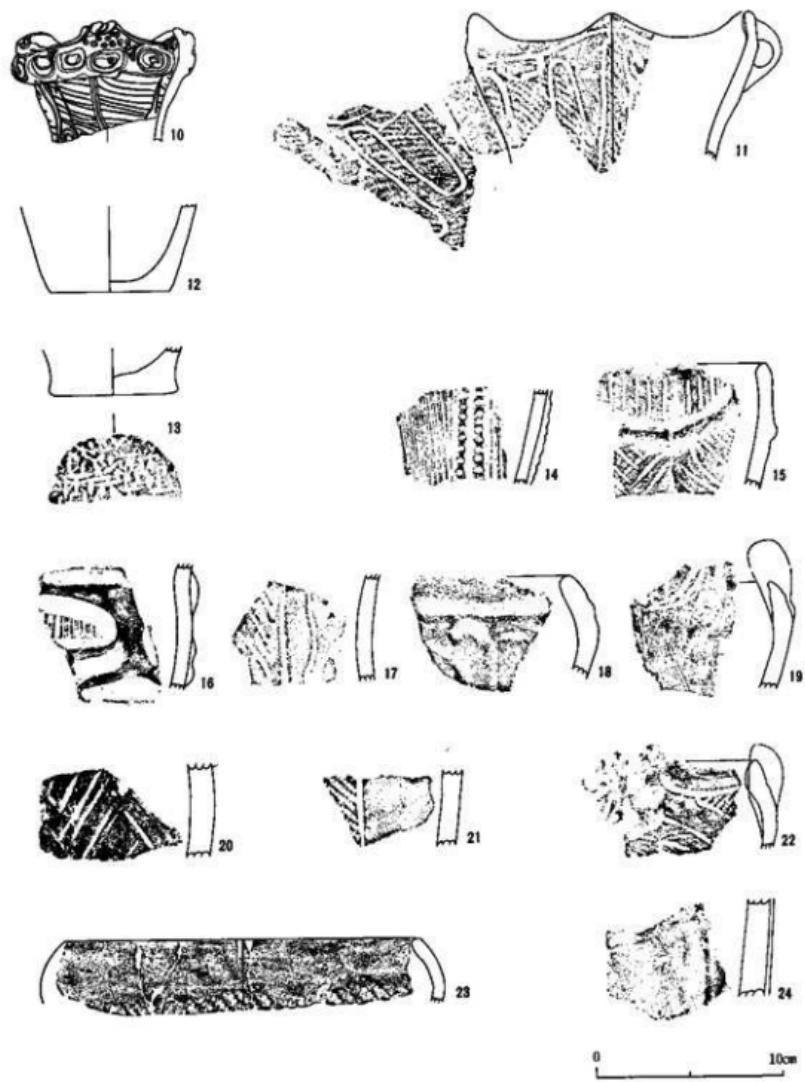
(3) 第3類

地文を有しないもので、隆帯を伴うものと素文のものとがある。

- A 断面カマボコ状の調整されない隆帯をもつもの。
B 断面が扁平な台形を呈す比較的背の低い調整された隆帯をもつもの。
C 断面が三角形状を呈する調整された隆帯をもつもので、隆帯の調整面は内湾している。
D 無文のもの。

第1号住居址出土土器 (第15図10~24)

- 1類A-b(14) 隆帯が2本1組で構成されるもの。隆帯には刻が施こされている。
1類A-c(15・16) 15は口縁に弧状の区画文からなる文様帶をもつもの。16はX字状把



第15図 第1号住居址出土土器 (1/3, 10は1/6)

手の付く鉢形土器の文様帶の部分であろう。

1類B-a(10・17) 10は渦巻文を有する大きな突起で3単位に区分され、それぞれの中間に渦巻文を有する小さな突起をさらに3単位配している。口縁部は粘土帯の貼り付けにより肥厚し、太い凹線による環状文が配される。胴部はヘラ状工具による渦巻文のあるH状の懸垂文を配した後、右傾する沈線を施文している。17は胴部を縦位に区切る沈線の他に蛇行懸垂文が施文されている。

1類B-b(19) 黒褐色を呈する焼きの良い土器であり、口縁には突起が付けられている。突起から口縁にかけて沈線がめぐり、沈線下には浅い沈線による枠状の区画が認められる。

1類C-c(20) ヘラ状工具による比較的長く浅い列点文が施文されている。

1類D(18) 内湾する口縁に一条の沈線がめぐり、沈線下には枠状の区画文が配されたものであろう。

2類C(11・21・22) 11は波状口縁を呈する接合関係のみられた小型の深鉢形土器である。口縁には横状把手が付けられ1本の沈線がめぐる。LR繩文施文後波状に沈線を施文し、沈線間の繩文を一部磨り消している。口縁の沈線下には一個所環状の区画が残っている。加曾利E III式土器である。21はLR繩文と幅広の磨消部をもつ。22は内傾する口縁に突起を有する。口縁直下に沈線をめぐらし、胴部は曲線的な文様構成をとるものと思われる。繩文はLRで一部施文方向を変えている。

2類D(23) 口縁に無文部を残しRL繩文を施文している。器内面には朱痕が認められる。

3類C(24) 断面三角形の調整された小さな隆帯を垂下させている。

3類D(12・13) 12は周溝内より出土した赤褐色を呈する焼きの良くない土器の底部。13は底部が若干張るもので網代痕を有す。

第2号住居址出土土器(第16図25~32・第17図33~55)

1類A-a(27・33) 27は埋甕として用いられていた土器で底部は抜き取られている。縦位の沈線が底部近くまで施文され、隆帯の一部が剥落しているが2本1組の隆帯が4単位に配されたものと思われる。33は頸部に横位の隆帯を配し、胴部にも隆帯による懸垂文をもつ。口縁が無文となる深鉢形土器であろう。

1類A-b(25・34) 25は口縁に隆帯による区画文をもち、胴部には沈線による懸垂文を配している。34は細い隆帯による懸垂文をもつ。隆帯はaにちかい。

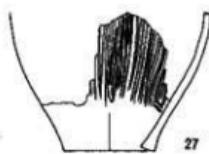
1類A-c(29・30・35・36) 29は口縁下に文様帶を有するX字状両把手の付く鉢形土器。30は5本刃による櫛刃状工具で地文を施文している。隆帯には刺突を加えている。35は



25



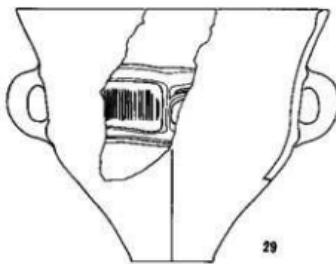
26



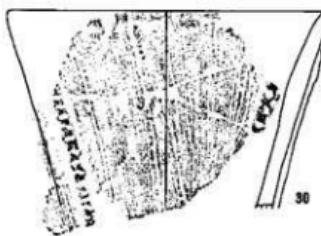
27



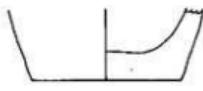
28



29



30



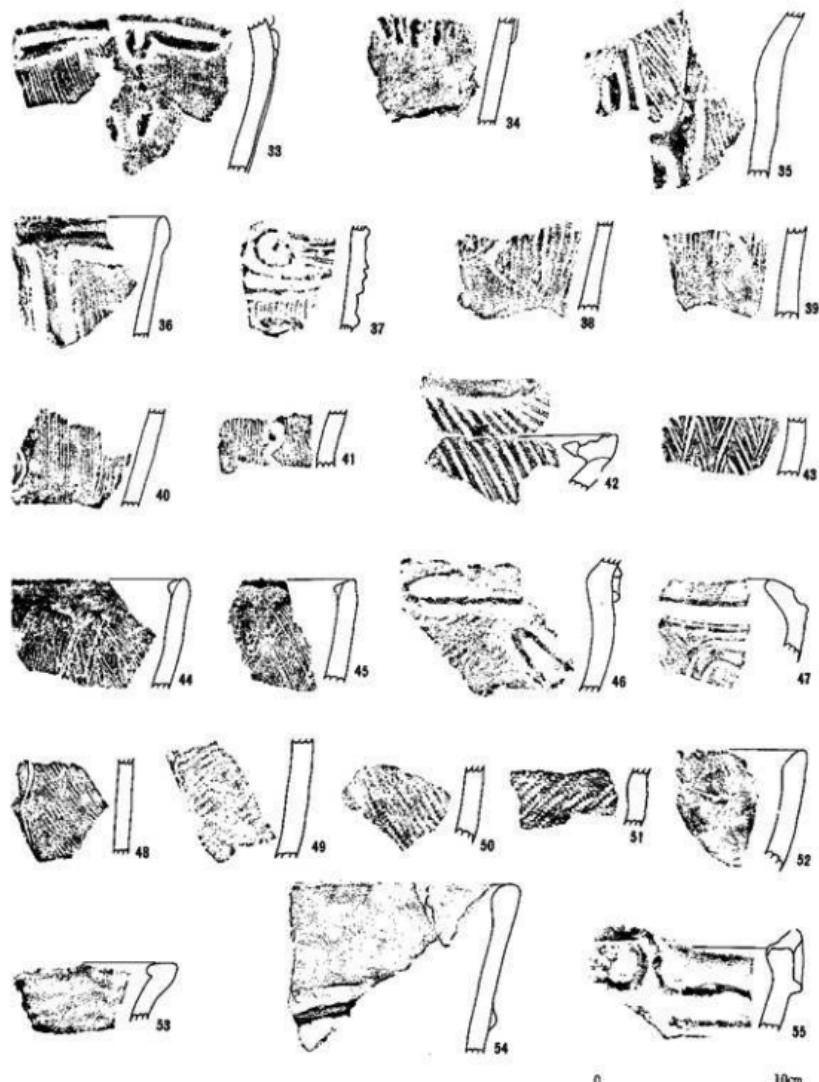
31



32

0 10cm

第16図 第2号住居址出土土器(1) (25~29は1/6, 30~32は1/3)



第17圖 第2號住居址出土土器(2) (1/3)

隆帯を胸部に H 状に配したもの。36 は肥厚した口縁から直接隆帯を垂下させ胸部に区画を構成する。

1 類 A - d (28・37) 28 は渦巻文が連結する文様構成をとる。器内面にはほぼ全面に朱痕が認められる。37 は口縁部に近い部分で、渦巻文と渦巻文とを横位に結ぶ形に沈線と刺突文を配したものであろう。

1 類 B - a (26・38～41) 縦位の条線状沈線を地文とし、蛇行懸垂文を配したもの。38・39 は同一個体。26・38・39 は半截竹管状工具による地文施文。40・41 は櫛刃状工具による。

1 類 C - a (42) 口縁が外反し口唇が内折するもので、半截竹管による比較的幅広の沈線を斜位に施文している。

1 類 C - b (44・45) 頂部がほとんど括れない深鉢形土器の同一個体による口縁部。口縁にわずかな無文部を残し、櫛刃状工具により条線状沈線を施文している。

1 類 C - c (43) 綾杉状沈線をもつ。

2 類 A (46) 隆帯は貼り付けられたのみの調整されないもの。2 本 1 組で構成するもので、頸部に横位、副部に弧状に配されている。繩文は LR。頸部が強く括れ口縁が無文となる深鉢形土器である。

2 類 B (47・48) 47 は口縁に太い沈線をめぐらせ、胸部には沈線区画による無文帯が配されている。繩文は LR。48 は LR 繩文地に蛇行懸垂文をもつ。

2 類 D (49～51) 49 は結節のある RL 繩文。50・51 は RL 繩文。

3 類 A (55) 口縁突起部に隆帯による渦巻文をもつ。隆帯はあまり良く調整されていない。

3 類 B (54) X 字状両把手が付く鉢形土器の口縁部であろう。

3 類 D (31・32・52・53) 31・32 は底部。31 は中央部が磨り消されている 1 本越え・1 本潜り・1 本送りの網代痕が残る。52・53 は口縁部。

第 3 号住居址出土土器 (第 18 図 56～60・第 19 図 61～74)

1 類 A - b (61～63) 61 は口唇内側に突帯を有する。口縁に幅の狭い無文部をおき、その下に区画による文様帯を配す。147 と同一個体であると思われる。62・63 共に隆帯は 2 本 1 組で同じモチーフを構成する。

1 類 A - c (57・64～68) 57 は口縁に区画文からなる文様帯を有する。胸部は渦巻文を有する隆帯と有しない隆帯を交互に配して 6 区画し、蛇行懸垂文を配する。地文は櫛刃状工具による綾杉状の条線状沈線。64・66・68 は胸部に隆帯を H 状に配したもの。65・67 は大きな渦巻文を構成するものであり、67 は隆帯が非常に薄く、沈線区画により無文帯化している部分も

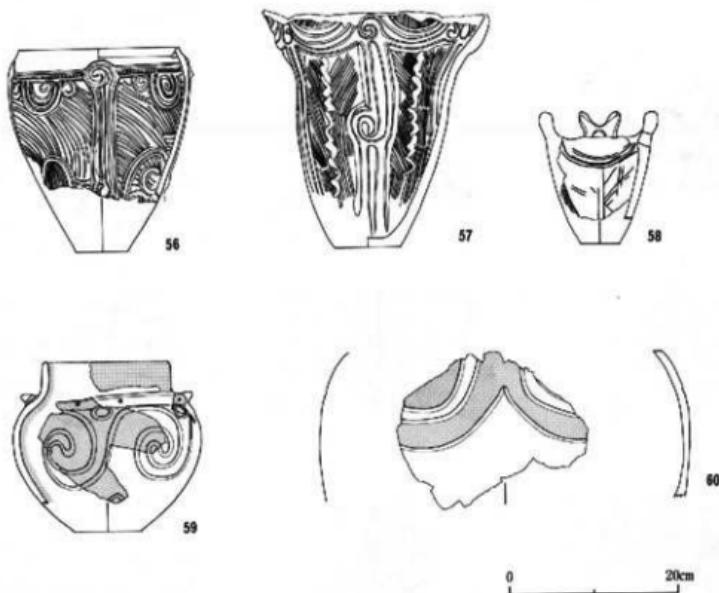
ある。

1類A-d(56) 口唇内側に突帯を有し口縁は無文帯となる。渦巻文を連結する3本1組の隆帯により胴部を4区画に分割し、区画内へは渦巻文を配している。口縁下の渦巻文を横に結ぶ隆帯間に刺突文を施文している。

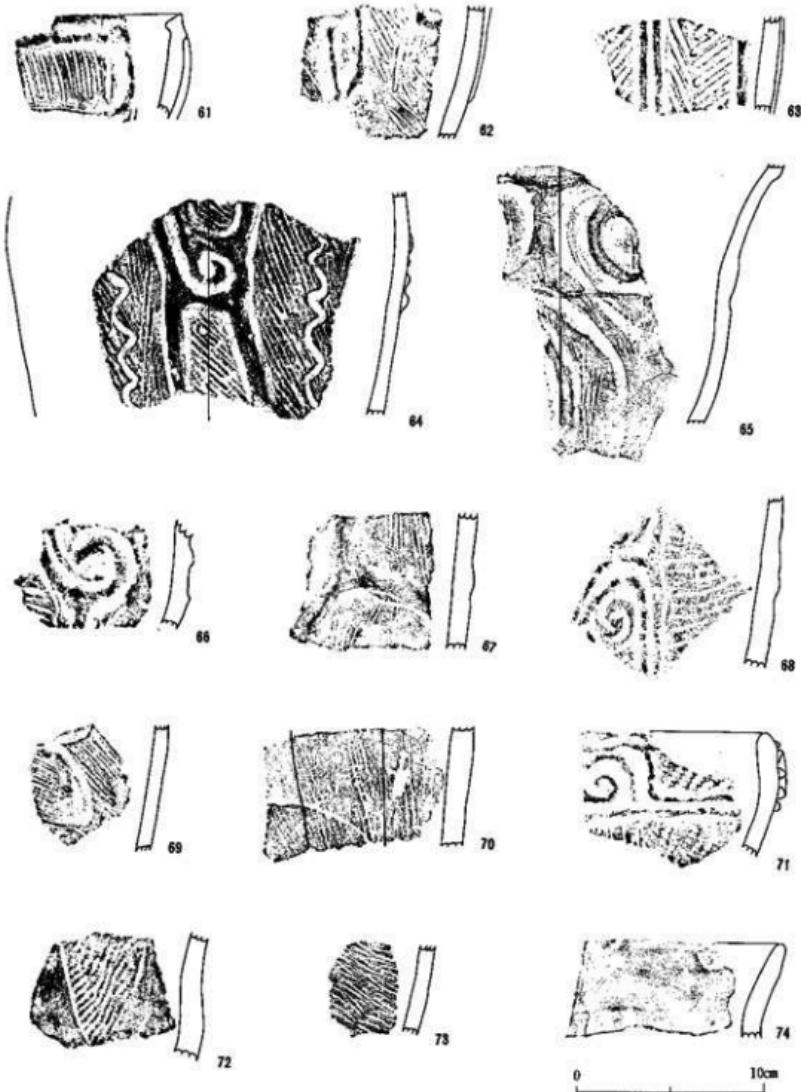
1類B-a(58・69) 58は口縁に孔を有する突起を3単位もつ小型の深鉢形土器。口縁には沈線による弧状の区画を有し、胴部にはわずかに地文を有し、区画状になる懸垂文を配している。69は櫛刃状工具による沈線地文の上に蛇行懸垂文をもつ。

1類C-b(70) 櫛刃状工具による縦位の条線状沈線をもつ。

1類D(59・60) 59は鋤部に孔のある有孔鋤付土器。内外面共に丹塗りされており、一部漆を用いている部分が認められる。地文を有さず、太い沈線により渦巻文が構成される。60



第18図 第3号住居址出土土器(1) (1/6)



第19図 第3号住居址出土土器(2) (1/3)

はかなり大型の有孔鉢付土器とみられる胴部の破片。表面はよく調整されており、太い沈線が弧状に配され、沈線による区画内は丹塗りされている。

2類A(71) LR綱文を施した後口縁に隆帯による渦巻文を配す。頸部には3本の沈線による懸垂文をもつ。

2類C(72) 沈線による逆三角形状の区画内にはLR綱文が施されている。

2類D(73) L綱文が施されている。

3類D(74) 外反する口縁で内外面共によく研磨されている。

第4号住居址出土土器 (第20図75~81)

1類B-a(77・78) 櫛刃状工具により地文を施した後棒状工具により懸垂文を施している。

1類B-d(76) 縦位の平行沈線の上に横位の沈線を施している。頸部に近い部分であろうか。あまり類例を知らない。

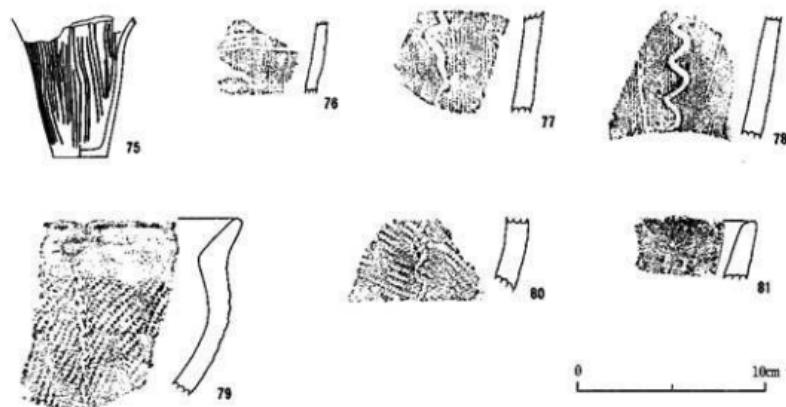
1類C-a(75) 小型の深鉢形土器。沈線を底部付近にまで施している。

2類D(79・80) 79は短い口縁部をもつ壺形土器。口縁は無文で結節のあるRL綱文を施している。80は結節のあるLR綱文である。

3類D(81) 無文の口縁部。

J-24特殊遺構出土土器 (第21図82~86)

1類A-b(82~84) 82は無文の口縁が強く外反する深鉢形土器で、口唇の内側には突



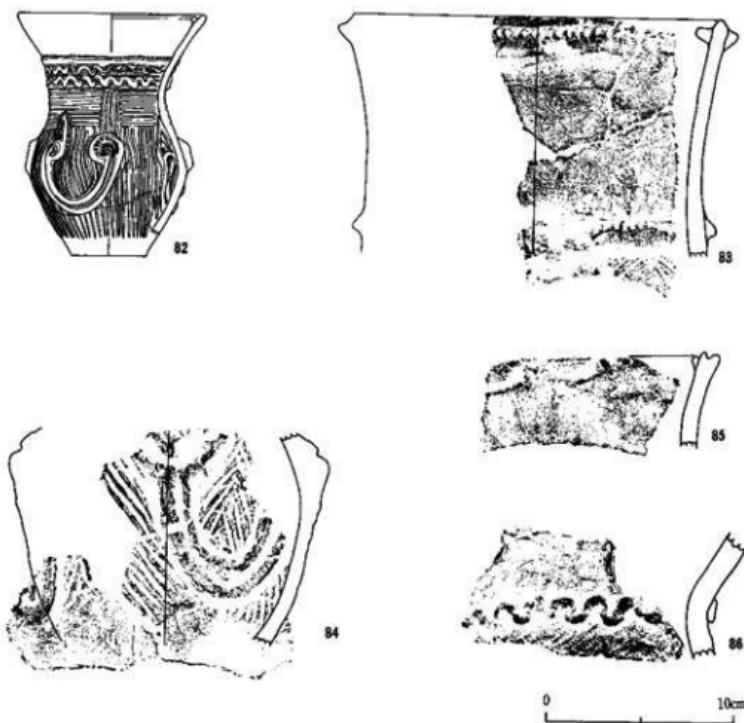
第20図 第4号住居址出土土器 (1/3, 75は1/6)

帶を有する。頸部には3本の隆帯を横位に配し、隆帯間には2本の波状隆帯をめぐらす。胴部には末端が劍先状の渦巻をなす弧状文を4単位配し、そのうちの1単位の渦巻部に刺突文を加えている。胴上位には、胴上部を4分割する形に縦位の沈線が渦巻の位置に施文されている。83は口唇内側に突帶を有しており、口縁と頸部の隆帯の脇に刺突を加えている。84は太い沈線地の上に2本1組の隆帯が弧状に配されている。

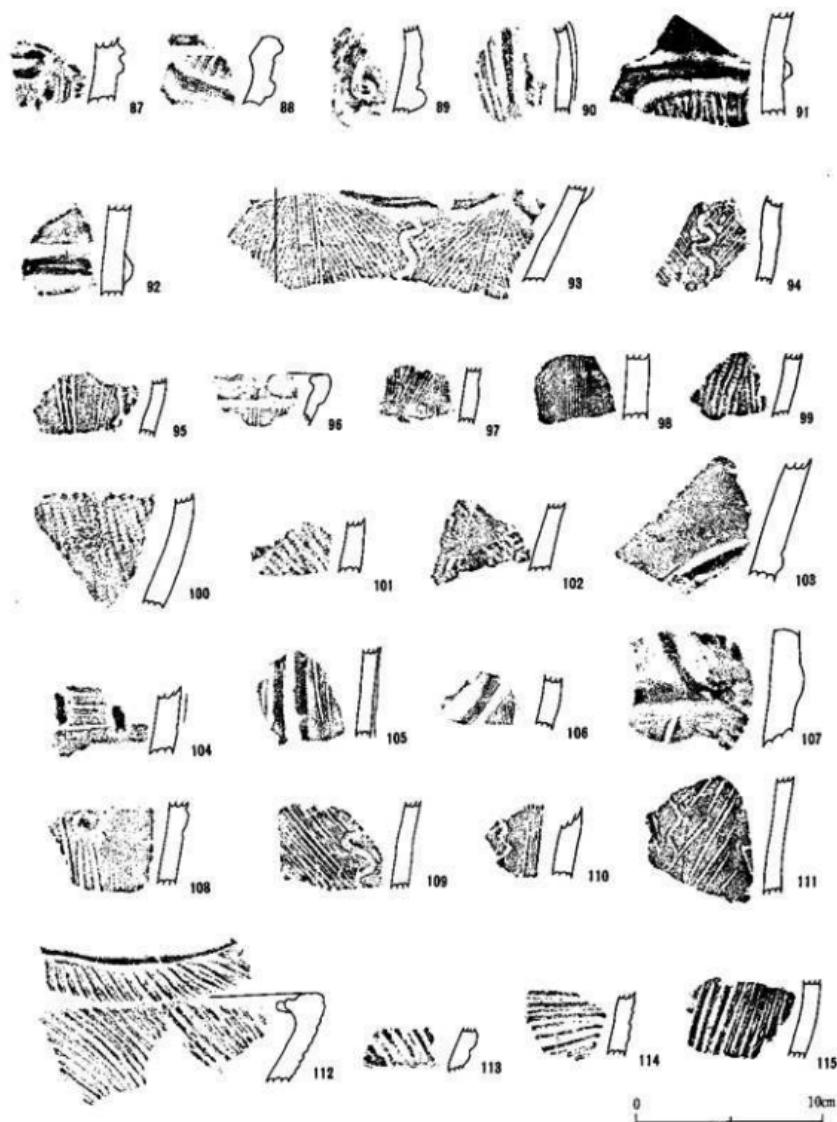
2類A(86) 長さ1.5cmほどの原体を縦位に回転させたRL繩文を地文とし、調整されない蛇行する隆帯を頸部に配している。

3類D(85) 口唇内側に突帶を有し、口唇部には沈線をめぐらしている。

G-23・24、H-23・24 グリッド出土土器 (第22図87~103)



第21図 J-24特殊遺構出土土器 (1/3, 82は1/6)



第22図 G-23・24・26・27, H-23・24・26・27グリッド出土土器 (1/3)

1類A-a(87) 頸部に横位に配された隆帯と胴部の隆帯による懸垂文をもつ。

1類A-b(88~90) 88は口縁部の区画文の部分。89は渦巻文を有し、90のような2本1組の隆帯が伴うものである。

1類A-c(91~93) 91・92は口縁が無文となりX字状両把手の付く鉢形土器であろうか。93は隆帯が弧状に配されたもので、沈線による胴部の区画内に蛇行懸垂文をもつ。口縁に隆帯による区画文をもつ土器の口縁部下である。

1類B-a(94・95) 94は綾杉状沈線の集合部に蛇行懸垂文をもつ。95は縦位の沈線による胴部の区画内に蛇行懸垂文を配したもの。

1類C-a(96・97) 96は肥厚した口縁下に縦位の沈線をもつもので、あまり類例を知らない口縁部である。

1類C-b(98) 楪刃状工具による条線状沈線を縦位に施文したもの。

2類C(99) 破片の左右にわずかに縦位の細い沈線が認められる。繩文はLR。

2類D(100~102) 100・101はRL繩文。102は結節のあるLR繩文。

3類B(103) 口縁が無文となる大型深鉢の頸部付近であろう。

G-26・27、H-26・27グリッド出土土器(第22図104~115, 第23図116~141)

1類A-a(104) ヘラ状工具による横位の沈線の上に隆帯をもつ。

1類A-b(105) 隆帯が2本1組で文様を構成するもの。

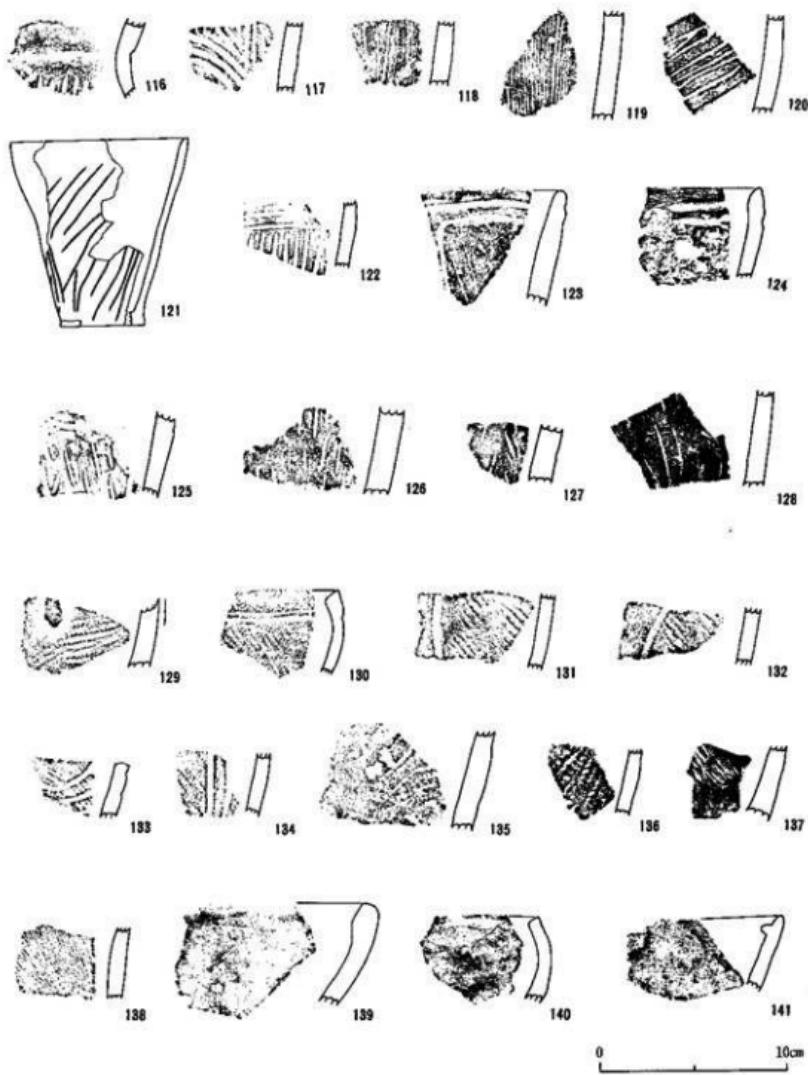
1類A-c(106・107) 106は渦巻文を構成する胴部。107は列点文をもつ。X字状把手の付く鉢形土器だろうか。

1類B-a(108~111) 108は渦巻文を有す。109と111は綾杉状沈線の集合部に蛇行懸垂文をもつ。110は縦位の条線状沈線の上に配したもの。

1類B-b(123~125) 123は口縁に一条の沈線をめぐらし胴部には区画文をもつ。区画内にはヘラ状工具による斜傾する沈線が施文されている。124も口縁に沈線をめぐらしており、表面が剥落してはいるものの胴部に区画文をもつものであろう。125は口縁にやや弧状を呈する沈線をもち、おそらく渦巻文か環状文が残るものであろう。縦位の区画内には列点文が施文されている。

1類B-d(122) 頸部付近の破片であると思われる。

1類C-a(112~118) 112~115は半截竹管による太い条線状の沈線をもつ口唇が内折する深鉢形土器の口縁部。116は無文となる口縁が肥厚している。117は綾杉状の沈線をもつ1類A-dの一部であろう。118は縦位に施文している。



第23図 G-26・27, II-26・27グリッド出土土器 (1/3)

1類C-b (119) 櫛刃状工具による縦位の施文。

1類C-c (120・121) 120はヘラ状工具による斜傾する沈線をもつ。121は左傾するヘラ状工具による沈線をもち、わずかに区画状に縦位に施文している部分もある。底部がわずかに張り口縁が直線的に開く深鉢形土器で、接合部等剥落している部分が著しい。

1類C-d (126～128) 126は雨垂れ状の列点文、127はハの字状に施文したもので、128は細く長い列点文をもつ。

2類A (129) RL繩文の上に調整されない隆帯をもつ。

2類B (130～134) 130は内湾する口縁に沈線をめぐらしたもの。繩文はRLで小型の深鉢形土器であろう。131・132は胎土に砂粒を多く含み乳褐色を呈する。沈線区画区にLR繩文を施文したもの。133はLR繩文を地文としており、沈線による渦巻状の文様を配する。134はRL繩文の上に沈線による懸垂文をもつ。沈線間は磨り消されていない。

2類D (135～137) 135はRL、136はRLR、137は底部に近い部分に無文部を残してL繩文を施文している。

2類E (138) 乳褐色を呈す比較的焼きの良い土器で、細かな燃糸文施文後に破片の右側に残る縦位の沈線を施文している。

3類B (139～141) 139は浅鉢であろう。140・141は深鉢形土器の口縁部で、141は口唇内側に突帯をめぐらしている。

その他の遺構出土土器 (第24図144～159、第25図160～181、第26図182～202)

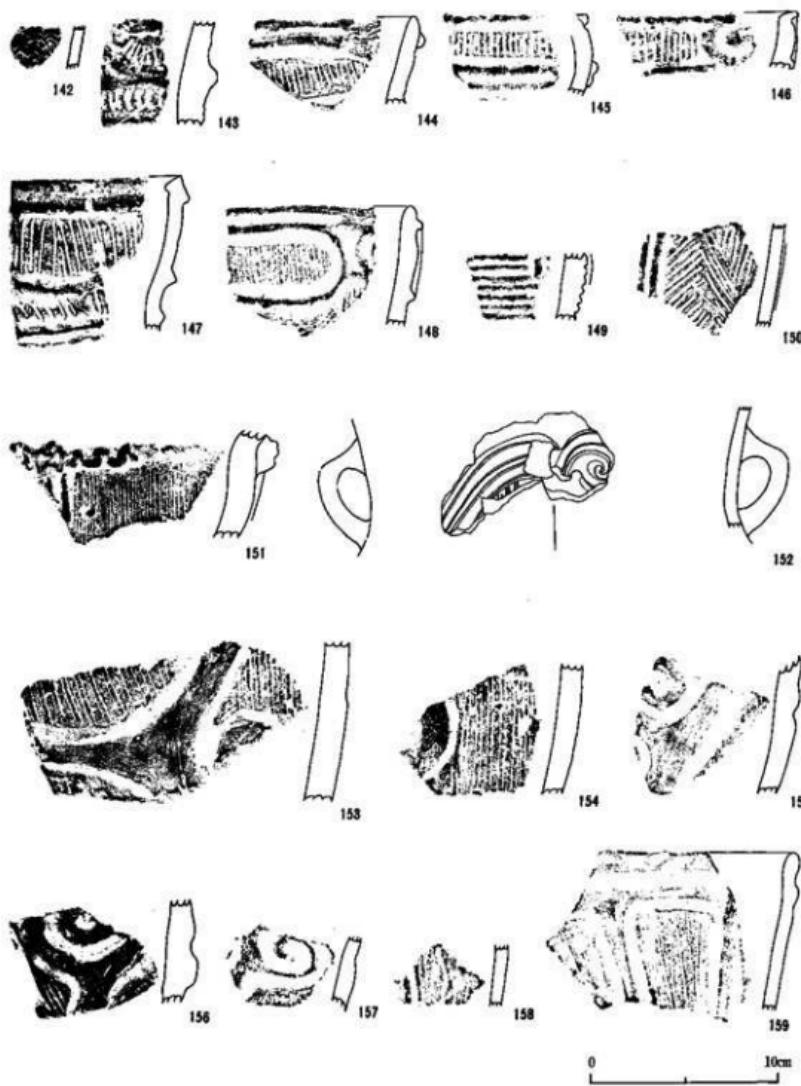
1類A-a (149・151) 149は横位の沈線地の上に隆帯をもつ。151は頸部に蛇行する隆帯を配し胴部には懸垂文をもつ。

1類A-b (144～148・150) 144～148は口縁に区画文からなる文様帶をもつもの。147は口唇内側に突帯を有し、隆帯も頂部が尖っていることから1類A-d系に属するものと思われる。150は2本1組の隆帯で文様を構成するもの。

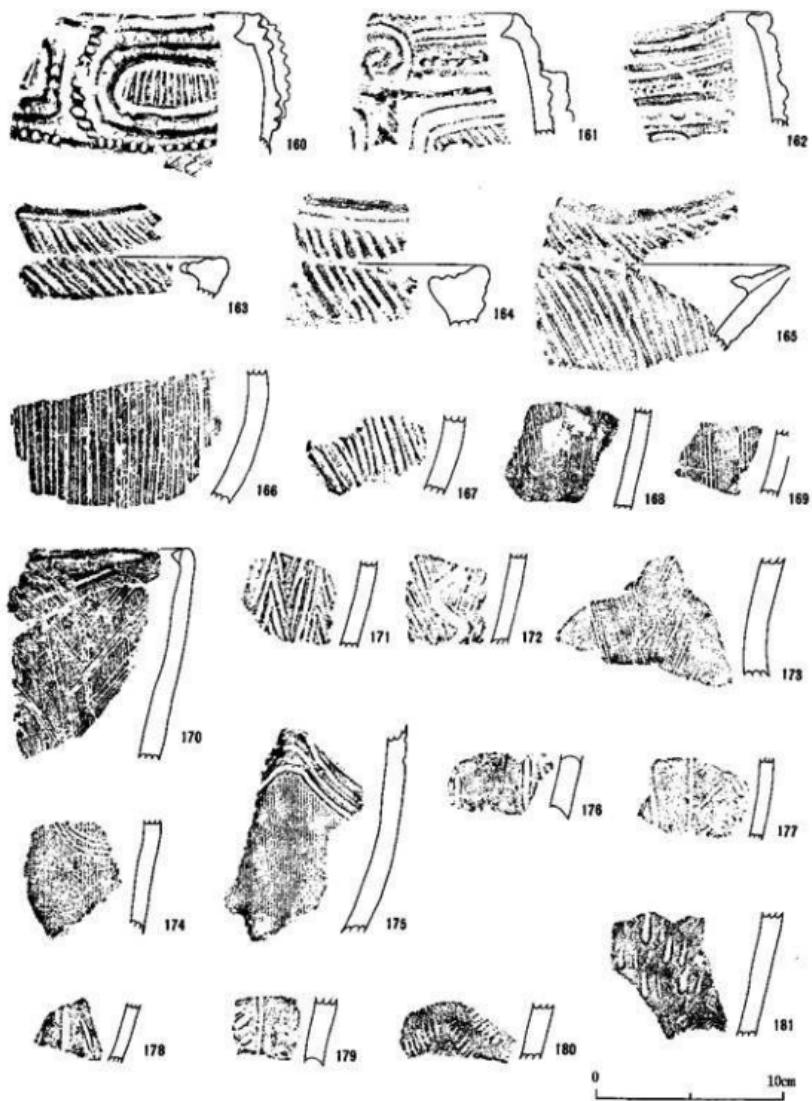
1類A-c (152～159) 152は無文の口縁とX字状把手を有する大型の深鉢形土器。153～157は渦巻文を構成する胴部。158は隆帯による区画内に懸垂文をもつ。159は口縁に太い沈線をめぐらし、胴部は隆帯による縦位の区画をもつ。

1類A-d (160～162) 160は口縁に文様帶を有す。隆帯には押圧を加え、隆帯間には刺突文を施す。161は交互刺突とひねりを加えた隆帯をもつ。162は波状をなす口縁部で、口縁部には文様帶を有するもの。

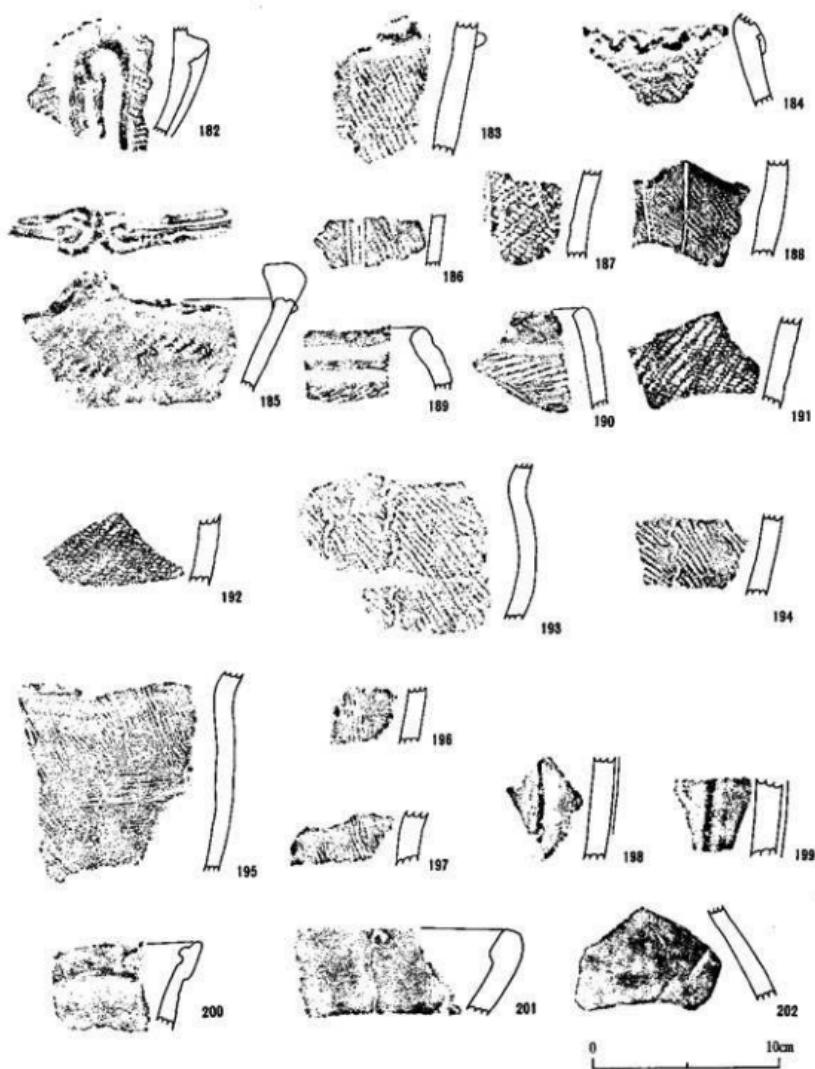
1類B-a (172・173) 縞杉状沈線の集合部に蛇行懸垂文をもつ。



第24図 遺構外出土第1群・第2群土器 (1/3, 152は1/6)



第25図 遺構外出土第2群土器(1) (1/3)



第26図 遺構外出土第2群土器(2) (1/3)

1類B-b (176～179) 沈線による区画内にハの字状列点文を施文したもの。

1類B-c (174・175) 174は半截竹管による条線状沈線の上に弧状の沈線を施文している。175は櫛刃状工具による地文の上にヘラ状工具による4本の弧線文を有する。

1類C-a (163～168) 163～165・167は口唇が内折する深鉢形土器の口縁部。166・168は縦位に施文したもので、168は底部に近い部分。

1類C-b (169・170) 170は2号住居址出土のものと同一個体である。

1類C-c (171) 沈線を綾杉状に施文している。

1類C-d (180・181) 180は櫛刃状工具によるハの字状の列点文。181はヘラ状工具による雨垂れ状の列点文である。

2類A (182～184) いずれもRL繩文を地文としている。182は調整された隆帯が渦巻を連結する形で縦位に配される。183・184は調整されない隆帯が頸部に配されたもの。

2類B (185～190) 185は口縁に突起を有し、口唇部には渦巻をなす沈線文が施文される。繩文はLR。186～188は縦位の沈線をもつもの。繩文はいずれもLRで、186は沈線間が磨り消されていない。189・190は口縁に太い沈線をめぐらせたもので口縁は内傾する。繩文はLR。

2類D (191～194) LR繩文で、193・194は結節を有する。

2類E (195～197) 赤褐色を呈した焼きのよい土器で、同一個体であると思われ、細かな燃糸文を施文している。195は胴下半では方向を変えて施文している。

3類C (198・199) 198は黄褐色、199は茶褐色を呈す。断面三角形の調整された隆帯を垂下させている。

3類D (200～202) 200は肥厚した口縁部の内側に突帶をめぐらせていている。201は浅鉢であろう。202は内外面共によく研磨されている。

第1群第2類土器について

第5号住居址出土土器は胎土中に纖維を含有するものと含有しないものとがあり、総じて前期前葉に位置付けられるものであろう。

B種には中厚手のものと比較的薄手のものとがあり、中には内面にわずかに凹凸の認められるものがある。これらは神ノ木式であろう。A種aは口唇部が角張らない点や内面が丁寧に調整されていることから、B種よりも若干新しいもののように思われる。A種bは内面にわずかではあるが凹凸を有する比較的薄手の土器である。半截竹管状工具を施文具として不鮮明な浅い沈線を格子目状に施文しており、平行沈線を横位に加えることで肋骨文の崩れた形の文様とな

っている。A種bが仮りに口縁部付近であるとして、A種a・B種の存在から、関係すると思われる神ノ木式にその類型を求めて、同様な文様構成をとる口縁部の類型は今のところ知られていないし、勿論有尾式の中にも認めがたい。また、沈線が浅く不鮮明であり器壁が比較的薄手であることと両式の中には発見できない。むしろ不鮮明な半截竹管状工具による格子目状の文様をもつものは中越系の土器群にみられ、A種bの特徴は中越系土器群の型式内容のいくつかと付合する。

第5号住居址から出土した第1群第2類土器は神ノ木式に代表される時期の土器であるが、中でもA種bは比較的古い部分であり、A種aは若干新しいものと思われる。

第2群土器について

第2群土器は中期後半の土器群であり、曾利系・唐草文系・加曾利E系の土器群を主体としている。曾利系・唐草文系のものは多くが第1類に含まれ、加曾利E系と曾利系の一部を含めたものが第2類に、それぞれ若干の異同と他系統のものを含め、大きく以上のように分類された。

曾利系及び唐草文系にあたる第1類のうち1類Cは沈線による文様が施されたものであり、これはほとんどが地文としての沈線文である。したがって地文のみでは細かな型式判断を下しがたいが、曾利系土器群については地文の在り方に大まかな傾向を指摘することができ、一定の時間枠を付すことができる。

曾利I式は半截竹管状工具による整然とした比較的幅広の深い縦位の条線状の沈線をもつ。曾利II式では曾利I式と同様な沈線の他にヘラ状工具による粗雑な斜傾する沈線が施文される。これは唐草文系の影響下にある土器に多くみられる。曾利III式では半截竹管状工具による条間の狭い密な条線状の沈線が主体となり、櫛刃状工具の新たな出現とヘラ状工具による粗雑な沈線も認められる。曾利IV式の沈線地文の在り方は曾利III式と基本的に変わらないが、密な条線状の沈線の多くは櫛刃状工具により施文されるようになる。曾利V式には条線状沈線はほとんど認められなくなり、列点文が主体となる。列点文は曾利IV式から多く認められるようになるが、すでに曾利II式にも現われている。ただ曾利II式のものはハの字状等斜位に施文されることはないようであり、多くが雨垂れ状で縦位に施文されている。

曾利系土器群における地文の変遷については米田の研究に詳しい。本遺跡における沈線文

註(1) 戸田哲也・大矢昌彦 1979「神ノ木式・有尾式土器の研究(前)」『長野県考古学会誌』第34号

(2) 米田明訓 1978 「曾利式土器編年の基礎的把握」『長野県考古学会誌』第30号

による地文の変遷も米田の指摘に沿うものであった。

次に、曾利系と唐草文系土器群を沈線と共に特徴づける文様である隆帯の在り方について、地文との関係から流れを辿ってみよう。

隆帯を有するものはa～dに4別された。このうちdとしたものは唐草文系のものであり、bの中にも61や147等綾杉状や粗雑な沈線の地文をもったもの等、実際にはもっと多くのものが含まれている。ただ、唐草文系の影響を受けたとみられる土器と、所謂純然たる唐草文様式の土器とを破片から判断するには難しい場合が多い。この点、文様要素の在り方をさらに細かく抽出しなくてはならないが、今回はその作業ができなかった。これは次の機会を期すこととするが、曾利系土器群の隆帯については大旨a・b・cの順に変化している様子が看取される。

aは粘土紐を貼り付けたのみの調整されない隆帯であり、深鉢形土器の頸部や胸部に蛇行する隆帯として貼り付けられる場合が多い。曾利I式にも認められるが曾利II式に特徴的であり、曾利III式の古い部分にも認められる。bは断面がカマボコ状を呈する比較的背の高い調整された隆帯で、隆帯の脇には調整時に加えられる沈線を伴う場合が多い。この隆帯は2本1組と3本1組でモチーフを構成する場合が多く、隆帯間に調整時の溝が残るのみで隆帯間は接近したものとなっている。この隆帯は曾利I式とII式、それにIII式の一部が有するようである。ただ、曾利I式のものは多くが隆帶上に刻を施しているし、梨久保B式も隆帯間に連続押引文を施文している。曾利II式の場合は2～3本で胸部に文様が構成される場合がほとんどであり、曾利III式の場合は2本で口縁部の区画文を構成するものが多い。したがってbの隆帯は曾利II式の胸部と曾利III式の口縁部に特徴的だと言えるだろう。cは断面形が扁平な台形を呈する調整された比較的背の低い幅広な隆帯であり、隆帯の脇には調整時に加えられる幅広の沈線やなぞりの部分がある。この隆帯はbの隆帯が2～3本1組でモチーフを構成する場合が多いのに比べ、多くが1本でモチーフを描く。cの隆帯は曾利III・IV・V式にみられるが、新しくなるにつれ隆帯は低くなる傾向にあり、調整された太い沈線を施文することで隆帯状の効果を出すようになる。dは唐草文系の土器に多くみられる隆帯であるが、隆帯の幅が若干狭い他はほとんどbの隆帯と変わらない。唐草文系土器の隆帯は地文の在り方と共に変化が捉えにくく、唐草文系土器を理解して行く上での今後の一つの課題である。

以上ごく大雑把に各隆帯の在り方をながめてみた。曾利系土器群における隆帯の在り方については前述した米田の研究にも若干ふれられている。隆帯は沈線と共に曾利系土器群と唐草文系土器群を特徴づける文様要素であるため、今後さらに両者についての細かな観察がなされる必要があるだろう。

以下他の類について若干のまとめを記しておこう。

1類Bは沈線による地文の他に別の沈線を伴うものである。このうち沈線による懸垂文をもつB-aは曾利II・III・IV式にみられる。曾利II式期のものは曾利系土器群よりも伊那谷系の土器群に多く採用されている。III・IV式のものは多くが縦位や綾衫状に施文された密な条線状沈線をもつものと組み合わさるようである。またB-bはほとんどが曾利IV・V式に比定される。

胸部に弧線文をもつB-cは地文等からみて曾利III~IV式段階のものと判断される。胴部に弧線文をもつ土器は近くでは茅野和田遺跡東地区Pit1出土の曾利III式段階の土器がある。⁽¹⁾

このような弧線文(連弧文)を有する一部の土器は加曾利E II式期に関東地方を中心とした地域で盛行している。加曾利E II期は所謂キャリッパー形土器の分布が拡大するため、これに伴っての関東地方からの影響とも考えられるところである。

ところで、茅野和田遺跡東30号住居址出土の埋甕は伴出した唐草文系の土器からみても曾利II式段階のものとみなされる。この型式の土器は曾利II式段階の伊那谷南部に分布の中心を有すると考えられ、同地域ではこの型式の土器に中富IV式・V式が伴うようである。また伊那谷の土器群の中には弧線文を有する土器等、東海地方の影響を強く受けたと考えられる土器がわずかながら存在している。茅野和田遺跡東30号住居址出土の埋甕の存在は、伊那谷南部でのこの型式に伴うとみられる中富式系土器群の関係を、間接的ではあるが八ヶ岳山麓での他の資料の中に見出してみる必要があることを物語っている。

弧線文を有する土器についてはこの地域での資料がごく少ない現在その系譜を辿ることは難しいが、関東地方と伊那谷を介しての東海地方からとの2系が今のところ考えられる。関東地方での連弧文の発生は加曾利E I式の末期には認められるようである。伊那谷を介しての中富系土器群との関係は若干遅れているようであるが、さらに伊那谷での編年研究が進めば時間差は埋まるものと思われる。伊那谷での条線状沈線を地文とした弧線文を有する土器の存在は、B-cに限って言えば共通したものと言えそうで、伊那谷を介しての東海系の影響がより強いものと仮定しておこうと思う。

註(1) 佐藤 攻・他 1970 「茅野和田遺跡」茅野市教育委員会

(2) 末木 健 1978 「伊那谷中部繩文中期後半の土器群とその性格—予察—」

『信濃』第30巻第4号

(3) 増子康真 1978 「繩文中期後半土器の編年—東海地方西部地域—」『古代人』第34号

第2類は加曾利E系と曾利系のものがほとんどである。このうちEとした撚糸文を施した土器は從来あまりよく知られていなかった土器である。中期後半で撚糸文を地文にもつ土器は曾利II式期の諏訪市本城遺跡第22号住居址にみられる他はあまり類例を知らない。

撚糸文をもつ土器は藤内II式から井戸尻式の前半期に特徴的だが、中期後半までその脈絡を辿ることは今のところできないようである。また、伊那谷の中期後半の土器群の中には僅かながらも認められるため、伊那谷南部を介しての中富前半型式の影響が考えられるところである。資料の少ない現在第2類Eについては多くが不明であるが、撚糸文をもった土器の存在を指摘し、中富前半型式や本城遺跡例から判断して、曾利II式期に属するものとして位置付けておこうと思う。

第3類Aは曾利II～III式、第3類Bは曾利III～IV式にそれぞれ比定されよう。第3類Cは調整された調整面が若干内湾する、断面形が三角形を呈する隆帯をもつもので、この隆帯は曾利系・唐草文系土器群にみられる隆帯とは異なる。第2類中の加曾利E式末葉の土器と同系のものであろう。

以上各類についての若干のまとめを行ってきた。八ヶ岳西山麓は曾利系土器群分布の西縁地域の一部であり、唐草文系土器群の分布と交錯する地域である。さらには加曾利E系や伊那谷南部の土器群の影響もあり、土器の様相には複雑なものがある。あらためて各地域での編年研究の必要性を感じる次第である。その点において十分な分析ではあり得なかつたものの、尖石・与助尾根での同時期の土器の在り方が必ずしも明らかでない現在、本遺跡の土器群の関係の中に推定できるだけの指摘はなし得たと考える。

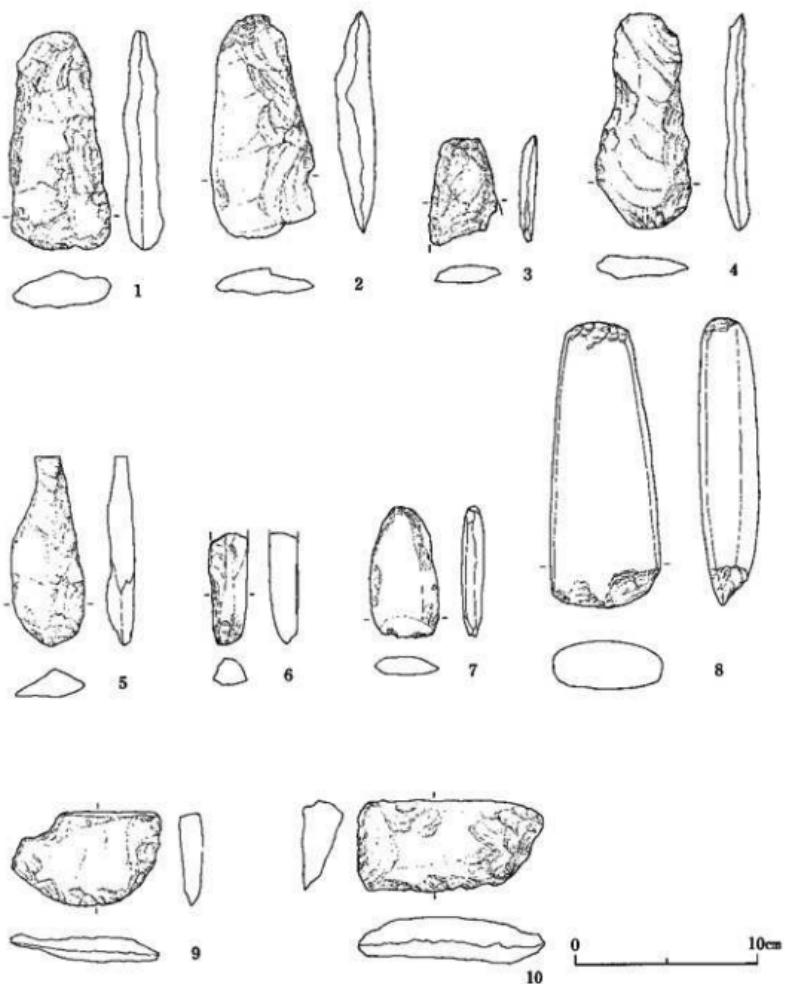
第2節 石 器

調査区より出土した石器類は、打製石斧6（内、破片2）・局部磨製石器1・磨製石斧1・横刃形石器2・凹石10・磨石1・石鍬8・石錐1・不定形な黒曜石製の剥片石器6・縦長状の剥片1・石棒1・黒曜石碎片208・その他の剥片5であった。

1 打製石斧（第27図1～5、図版第九ー1～5）

打製石斧は6点出土しており、図示したものの他にD-9より出土した刃部側縁の破片が1点ある。

註(1) 松永満夫・他 1975 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」長野県教育委員会



第27圖 出土石器(1) (1/3)

1類（1～3） 平面形状が短冊形を基本とするもので、刃部にちかい下半部がやや広がっている。1は玄武岩製の比較的重い石斧で刃部は厚い。刃先は使用のため潰れており銛きがない。2は刃部が比較的薄く、右側刃部側縁が張り出している。3は体部下半を欠損する。

2類（4・5） 平面形状が楔形を呈し、刃縁に丸味を有する。4は出土した打製石斧の中では最も薄身であり、胴部側縁中央部に抉り込むような加工を加えている。刃部は磨耗しており、左側刃縁は直線状を呈している。5は背面がかった粘板岩を素材としたもので、左側縁上部が内湾し頭部の幅が狭く仕上げられている。刃部や刃部側縁には磨耗痕が認められる。

2 局部磨製石器（第27図6、図版第九-6）

青緑色の粘板岩を素材とした棒状を呈する石器である。裏面は平坦な部分が多く背は丸味を有しており、断面形はカマボコ状にちかい形状である。刃部等、剥離後全体に磨きをかけているが、剥離面のすべてにまでは及んでいない。刃部は幅狭く片刃状であり、刃縁は丸味をもっている。木工用の工具であろうか。

3 磨製石斧（第27図7・8、図版第九-7・8）

5号住居址と2号住居址より各一点出土した。7は5号住居址より出土した小型の側縁に稜を有す扁平な磨製石斧である。刃部は欠損しており、丸味を有す頭部には敲打痕が認められる。8は2号住居址の覆土より出土した。胴部上半より胴部下半の幅が大きいもので、胴部の横断面形は膨らみをもつ隅丸長方形を呈する。刃縁は丸味をもっており、使用のための破損が認められる。

4 橫刃形石器（第27図9・10、図版第九-9・10）

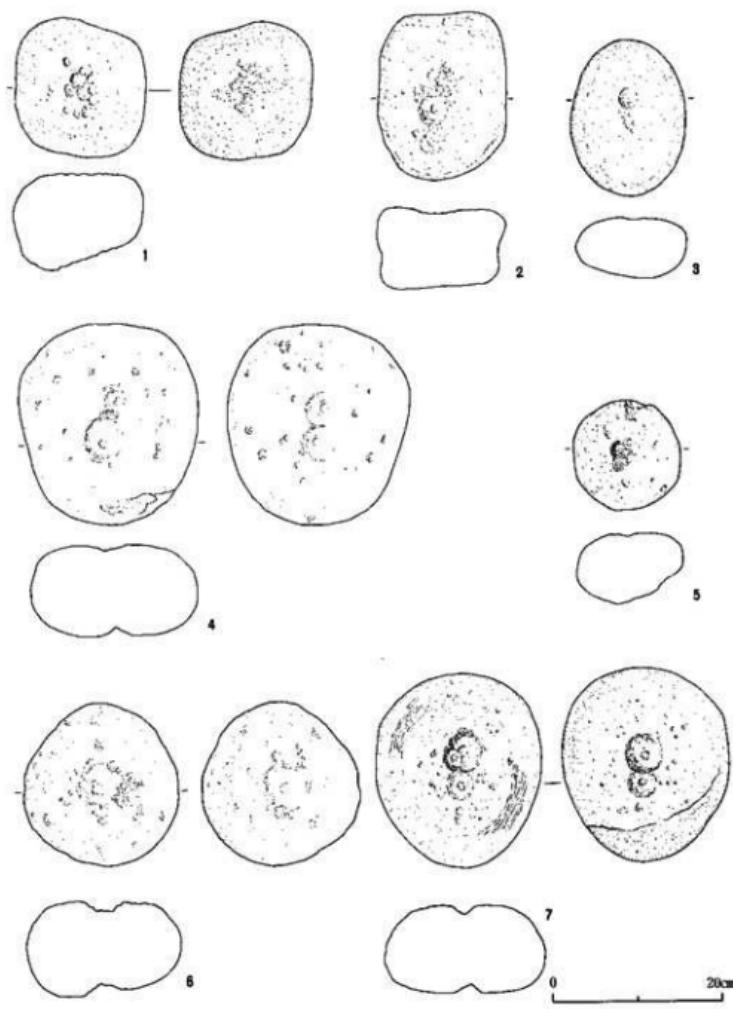
いずれも遺構外より出土した。9は背の部分に平坦な自然面からなる打面を残している。自然面は左側の突出した部分にも一部残っている。主剥離面の加撃点は背の内湾する部分にあり刃部はリングに沿って刃縁が外湾する形につくり上げられている。体部は比較的薄身であり、正面左側が特に薄い。10は平面形が長方形を呈し、体部は厚くわずかに湾曲している。背は厚く丸味をもっており、断面形は楔形を呈している。

5 凹石（第28図1～7・第29図8～10、図版第十-1～10）

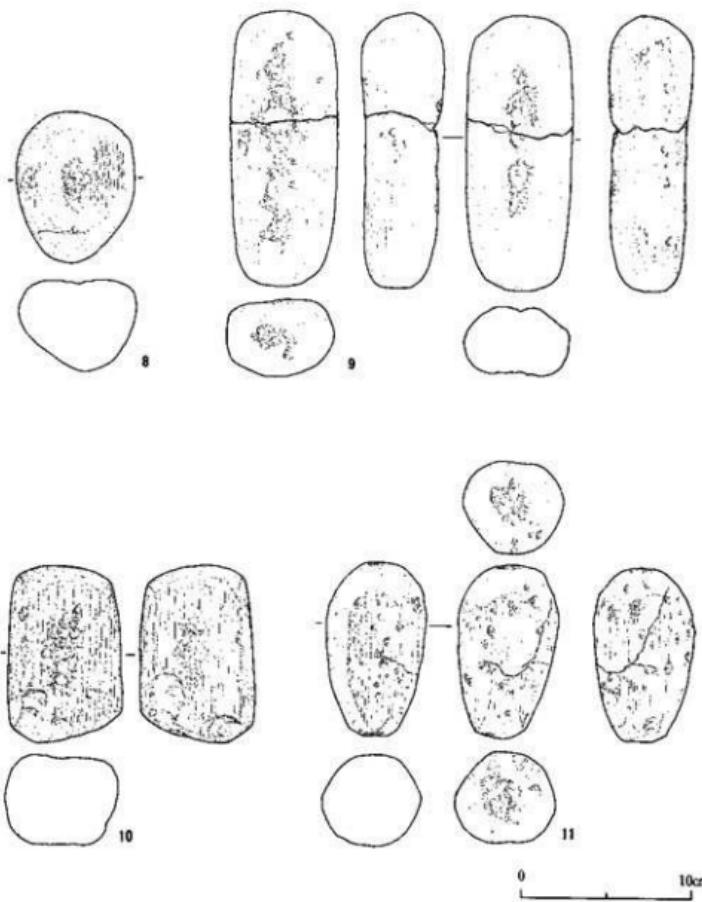
凹石は10点出土した。いずれも完形品であるが、3号住居址の炉址内から出土した9は中央部で折れている。凹石は平面形や大きさ、凹部の在り方等を観察した結果4類に分かたれた。

1類（1・2） 平面形が隅丸方形にちかいもので、浅い小孔が不整然に数多く集合しているもの。

2類（3・5・8） 平面形が円形にちかい比較的小型で重量の軽いもの。凹部は数少ない



第28図 出土石器(2) (1/3)



第29図 出土石器(3) (1/3)

小孔が中央部に集中して形成されている。8には磨痕が認められ、炭化物の付着と黒色にすりけた様な部分が認められる。

3類(4・6・7) 平面形は円形にちかい比較的大型なもの。凹部は平面形が円形で断面形がV字状の比較的深いもので、中央部に1~3個所認められる。7は一部に磨痕を有し、表面裏面共にすりけた様な黒色部分が認められる。

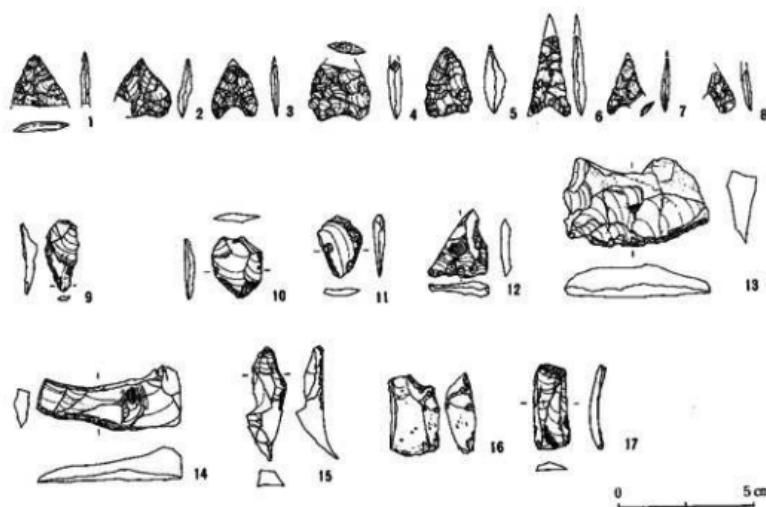
4類(9・10) 平面形が長方形にちかいもので、浅い小孔が数多く集合したもの。9には比較的深い孔も認められる。9・10共に磨痕を有し、特に10は著しい。9は下先端部に敲打痕を有しており、10は炭化物の付着とすりけた様な黒色部分がほぼ全体に認められる。

6 磨石(第29図11, 図版第十-11)

平面形は卵形で断面形はほぼ円形を呈する。面取りをしたような顕著で同規模な磨面が3個所設けられており、そのうち中央の面は稜の部分に設けられている。上下先端部は敲打面となり、わずかに平坦な面をなしている。

7 石錐(第30図1~8)

石錐は8点出土しており、そのうち4点が前期の第5号住居址より出土した。いずれも破損



第30図 出土石器(4) (1/2)

品であり、完形品は一点もない。石鎚は基部の抉込みの在り方によって3分類される。

1類（3・6・7・8） 凹基式のもので抉込みが比較的深いもの。

2類（2・4） 凹基式のもので抉込みがごく浅いもの。

3類（5） 平基式。

側縁の状態は5号住居址出土の1類が直線的な在り方をとるのに対し、2類・3類と1類の3は側縁が膨らんでおり、幅広に仕上げられている。1は下半部欠損のため類型は不明であるが、側縁が直線的な在り方を呈し幅広であることから、1類でも3と同様のものであろう。厚さは1類・2類の体部が平均した厚さであるのに比べ3類の体部は厚い。未製品であろうか。石質は6のチャートを除きすべて黒曜石である。

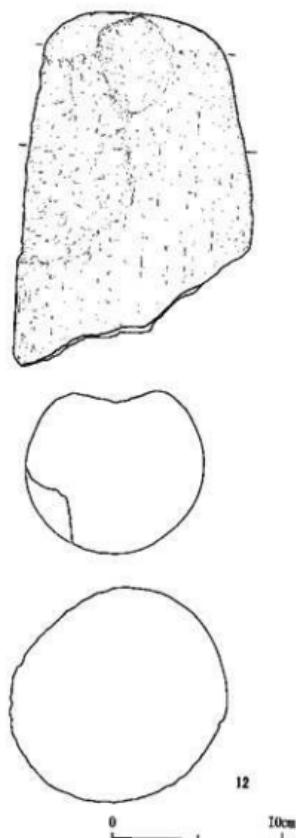
8 石鎚（第30図9）

主剝離面を残す黒曜石の剥片を素材としたもの。摘部と錐部の両側縁には片面からの調整剝離が行われているが、右と左では剝離の方向が異なる。錐部先端の横断面形は横に長い菱形を呈している。長さ2.6cm・幅1.2cm・重さ1.2g。5号住居址の出土である。

9 不定形な黒曜石製の剥片石器（第30図10～16）

剥片の縁辺の一部に刃部を有するもの。刃部が剥片の一辺に設けられ直線状を呈すもの（12～15）と抉込み状の刃部をもつもの（16），それに剥片の二辺に刃部を有し，刃部がくの字状に屈折しているもの（10，11）がある。刃部は片面のみから調整剝離されたもの（11・13～16）が多く、両面から行われたもの（12）と二者により作出された二つの刃部をもつもの（10）がある。

これらの剥片は13を除いて背面に自然面を残し



第31図 出土石器(5) (1/3)

ていない。また 13 は背面に一部自然面を残すがいくつかの小剥離面も残っており、これらの剥片はある程度剥離作業が進んだ段階で剥離された剥片であることがわかる。背面の剥離の方には主剥離面と同一方向のものと反対方向のものがあり、同一方向のもの（10～15）が多い。

10 縦長状の剥片（第 30 図 17）

両側縁が並行する縦長状の剥片である。下端は欠損しているが、背面中央に打点が認められるため折断されたものと思われる。背面左側縁部には自然面を残しており、背面の剥離方向は主剥離面と同一方向である。打面は平坦でバルブが認められる。先土器時代の所産であろうか。

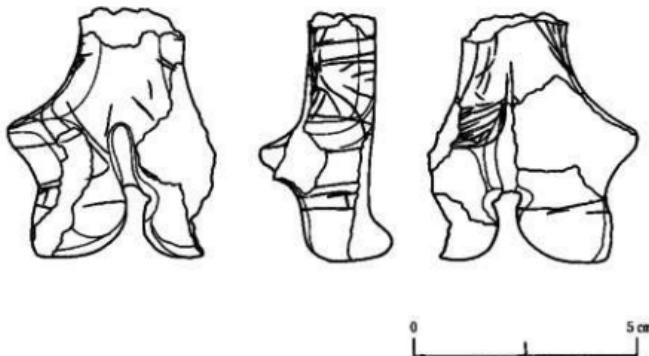
11 石棒（第 31 図、図版第十一-12）

H-23 グリッドより出土した。頭部の平らな無頭石棒で体部は斜位に欠損している。全体はよく磨かれているが、先端肩部下から体部下半にかけて、幅 12 cm ほどの敲打面が全体の 3/4 面ほどを帯状にとりまいている。この敲打面と磨面との接する部分に、頭部から体部にかけて彫刻された部分がある。彫刻部を平面で見ると、平坦な面をなす頭部の中心へ向かって三角形状に切り込んでいる。体部下半の欠損は、折断面の縁辺の在り方から判断して、全体の磨き後になされているようである。また、頭部から体部にかけては発掘時の欠損部が残っている。

第 3 節 土製品

1 土偶（第 32 図、図版第十一-13）

G-23 グリッドより出土した、上半身と左脚部及び右臀部を欠損する立像形の土偶である。



第32図 土製品（土偶）（1/2）

表面はよく調整されて焼きはよく赤褐色を呈す。腰部は張り出し、臀部はくの状に突出し、脚は短かく底面の平坦な円柱状を呈している。股部は棒状T.具による凹線で表現されており、体部と脚部には細線が施文されている。細線は正面では腰部から股部と脚部にかけてたすき状に施こされており、背面では臀部をハート形に表現している。現高 5.7 cm・腹部厚 1.5 cm・臀部厚 2.5 cm・現存幅 4.7 cm。曾利III式期頃の所産であろうか。

(鵜飼幸雄)

第1表 出土石器一覧表〔単位cmおよびg, () 内は現存値〕

捕獲番号	No.	出土区	種別	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
第27回	1	M-9	打製石斧	12.0	5.5	2.0	188	玄武岩	刃部に磨痕を有する
〃	2	2号住居址	〃	12.2	5.7	2.1	142	砂岩	
〃	3	3号住居址	〃	(5.9)	(3.9)	(1.0)	(23)	結晶片岩	下平部欠損
〃	4	3号住居址	〃	11.9	5.3	1.4	101	〃	刃部は磨耗している
〃	5	G-23	〃	10.4	4.0	1.5	76	粘板岩	刃部と刃部側縁に磨耗痕あり
〃	6	2号住居址	局部磨製石器	(6.1)	(2.1)	(1.6)	(28)	〃	
〃	7	5号住居址	磨製石斧	12.2	3.7	1.2	30	長石	
〃	8	2号住居址	〃	15.8	6.0	3.3	503	麦薺綠岩	
〃	9	G-21	横刃形石器	5.3	8.2	1.4	59	粘板岩	
〃	10	B-11	〃	10.3	5.0	2.2	143	石英斑岩	
第28回	1	表採	凹石	8.2	7.7	6.2	437	安山岩	
〃	2	1号住居址	〃	10.0	7.7	4.7	602	〃	
〃	3	表採	〃	9.3	6.7	3.6	256	〃	
〃	4	H-23	〃	12.0	10.6	5.6	870	〃	
〃	5	3号住居址	〃	6.4	6.3	3.8	128	〃	
〃	6	H-27	〃	9.6	9.2	5.6	470	〃	
〃	7	3号住居址	〃	11.6	9.9	5.2	732	〃	一部に炭化物付着 異色を有する
第29回	8	4号住居址	〃	9.0	7.0	5.1	406	〃	磨痕を有する
〃	9	3号住居址	〃	16.4	6.3	5.0	766	〃	磨石と併用
〃	10	〃	〃	10.6	6.8	5.9	649	磨石と併用	磨石と併用
〃	11	2号住居址	磨石	10.3	5.9	6.0	345	〃	磨石と併用
第30回	1	〃	石鎚	(2.9)	(2.1)	(0.3)	(1.2)	黒曜石	基部欠損
〃	2	〃	〃	(2.2)	(2.0)	(0.4)	(1.4)	〃	基部欠損
〃	3	H-21	〃	(1.9)	1.6	0.3	(0.7)	〃	先端部欠損
〃	4	4号住居址	〃	(2.2)	2.2	0.5	(2.2)	〃	先端部欠損
〃	5	5号住居址	〃	2.6	(1.7)	0.8	(2.9)	〃	右側先端欠損
〃	6	〃	〃	(3.0)	(1.5)	0.4	(1.6)	チャート	先端部及び脚部欠損
〃	7	〃	〃	(2.0)	(1.3)	0.3	(0.5)	黒曜石	先端部及び脚部欠損
〃	8	〃	〃	(1.5)	(1.0)	(0.3)	(0.2)	〃	脚部のみ
〃	9	〃	石錐	2.6	1.2	0.6	1.2	〃	
〃	10	3号住居址	スクレイパー	2.3	1.9	0.4	1.7	〃	
〃	11	4号住居址	〃	2.3	1.6	0.4	1.6	〃	
〃	12	3号住居址	〃	2.5	2.2	0.6	2.3	〃	
〃	13	2号住居址	〃	5.3	3.3	1.2	19.6	〃	
〃	14	I-24	〃	5.3	2.4	1.2	10.8	〃	
〃	15	1号住居址	〃	4.2	1.0	1.0	3.5	〃	
〃	16	H-20	縦長状剝片	3.0	1.8	1.1	5.7	〃	
第31回	17	H-23	石棒	(20.8)	(14.2)	(14.1)	(3300)	〃	体部下半欠損

第V章 調査の成果と課題

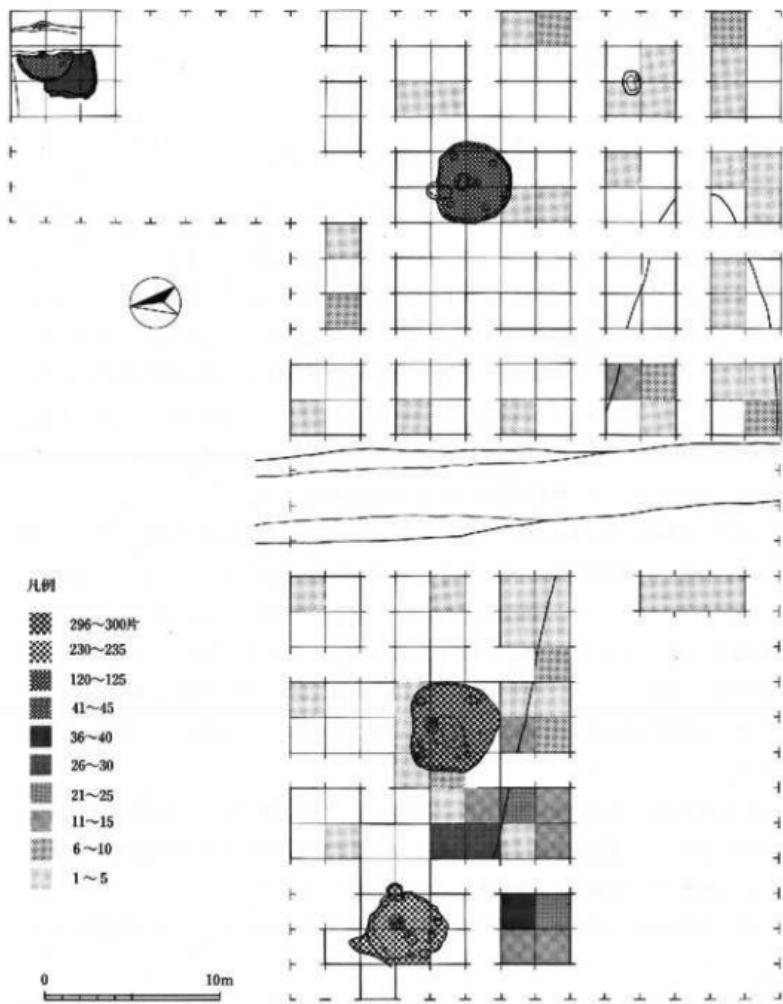
第1節 調査区における遺物の分布と出土状態

調査区において出土した遺物の総点数は1,116点である。出土した遺物は第5号住居址の遺物と黒曜石製の石器や剝片の一部を除き、ほとんどが縄文時代中期後半のものとみられる。遺物は調査区東側の1号住居址周辺と西側の2号住居址周辺の2個所に集中して出土している。

各住居址単位での遺物集中の割合は、1号住居址10.9%・2号住居址26.1%・3号住居址20.1%・4号住居址3.9%・5号住居址2.8%である。遺構外は36%であり、遺構外での遺物は発掘区南西側の包含層より多く出土している点が注意される。

出土した石器類のうち、黒曜石製の石器や剝片は調査区の東側では散在しており、西側では住居址を中心とした部分に集中する傾向にある。東側のものは前期の5号住居址との関係が強いものと思われる。また、石斧や凹石等の石器類は2号住居址とその周辺に多く、ほとんどが住居址と同時代のものと見做せる。土器は全体の63.8%が住居址に集中している。これを各住居址別の割合でみると、1号住居址9.3%・2号住居址29.1%・3号住居址23.5%・4号住居址1.4%・5号住居址1.5%となる。遺構外では調査区の南西地域に集中し、G-23・24、H-23・24の4グリッドで5.6%，G-26・27、H-26・27の4グリッドで10%であった。なおこの8グリッドの土器片の総数は、遺構外全体を100とした場合の44.5%の割合となり、遺構外においてはこの地域に形成されている包含層に土器片が集中している。

以上のように遺物はある一定の部分に集中しており、特に住居址にその傾向が強い。住居址から出土する遺物は、床面下の埋甕や柱穴、炉址内のもの、床面出土のもの、覆土中のものに大きく分けられる。埋甕や床面の土器と覆土中から出土する土器との間には型式差を示すものもあるが、多くは同一型式内におさまるものと見做せる。また住居址外においては南西側のグリッドに集中している。これは同地区に形成されている包含層の存在によるためである。この地区的遺物の出土状態をH-26・G-26グリッドで見ると、平面的には散在するものの一定の層内にはほぼ同レベルで水平に遺存している。出土する土器片は同一個体と判断できるものでも接合しないものがあるし、器面の剥落したものなどすべて破片であった。これらの遺物は地形や土層の状態からみて谷に流れ込んだものとは思われず、同地区への廃棄行為により残されたものと考えられる。また、G-23・H-23グリッドより出土した土偶と石棒の存在は、



第33図 住居址・グリッド別の出土遺物量

廃棄に伴う特殊な行為の存在を思わせる。ただ廃棄の場としては住居の出入口部の前方にあたるため、集落全体からすればさらに下方へかけての部分であろうと思われる。背後の沢への廃棄が与助尾根との関連で強く考えられないことからも、この包含層については以上の様な推定が当を得ているものと思われる。

(守矢昌文)

第2節 小豎穴について

発見された3基の小豎穴のうち、1号・2号小豎穴は形態や構造、配された地形上の位置等からみて狩猟用の落し穴と考えられ主張されている遺構に属するものである。⁽¹⁾

2基の小豎穴は、小さな谷の詰った地形の、谷の主軸線よりも北側に位置している。このうち1号小豎穴は、谷の主軸線に沿う形に谷の頂部へ向って緩く傾斜する地形に位置している。また2号小豎穴は、谷の主軸線に対して直行する方向の、尾根の背の狭い平坦な場所に設けられている。1号・2号小豎穴の長軸はともに谷の頂部をやや下った位置に向いており、両者はほぼ65°の開きをもっている。2基の小豎穴は以上のような関係にあるが、他遺跡の例から判断すると、付近にはさらに数基の同類小豎穴の存在が予測される。

これらの遺構は、その性格上多くが日常生活の場とは離れた空間に設けられていたものと考えられ、日常の生活用具である土器が一緒に、しかも多量に発見されることはほとんどないものと思われる。したがって、発掘区から発見された住居址や多量の土器群で示される時期には直接結びつかないものと見做され、第1群1類や3類土器で示される時期、あるいはその他の空白の時期に位置付けられることになろう。市域での同類の遺構を有す遺跡は、蓼科山腹に所在する城ノ平遺跡⁽²⁾と櫛ヶ峰山塊南麓の小台地上に占地するよせの台の遺跡に次ぐ3例目の発見となった。

城ノ平遺跡は、三方を山地に囲まれ西に開けた平地の咽基、瀧ノ湯川の本流と支流の合流点に向けて突出した山地の直下に位置している。城ノ平遺跡は日常生活の場とは異なった空間にあり、土器等の生活用具や生活遺構はまったく発見されなかった。

よせの台遺跡は、標高920m台の朝倉山の西に隣接する山地から突出した、比較的狭い舌状

註（1） 宮坂英式・宮坂虎次 1965 「蓼科」茅野市尖石考古館

（2） 宮坂英式・宮坂虎次 1965 「蓼科」茅野市尖石考古館

（3） 宮坂虎次・他 1978 「よせの台遺跡」茅野市教育委員会

台地の平坦面にある。よせの台遺跡の場合は日常生活の場と重複しており、同類の並列する2基の小堅穴のうち1基は確実に前期末の住居址に切り込まれていた。また、前期前葉と中期後半の住居址も多数発見されており、わずかに土器は出土したもの、遺構が発見されなかつたのは早期であった。

与助尾根南遺跡の場合は中期後半の住居址に切り込まれているし、前期前葉の住居址もごく近くに存在している。

以上、市域で発見された3遺跡の事例からでも同類小堅穴の時期をある程度絞って行けるのであり、前期前葉以前の遺構であることが確実視される。遠く南関東地方の霧ヶ丘遺跡では縄文時代早期に位置付けられているし、近くでは岡谷市扇平遺跡でも同様な見通しを得⁽¹⁾、大岡村鍋久保遺跡では押型文土器群の後半の段階に位置付けられている。以上の若干の例やさらに多くの他の遺跡の例からみて、落し穴と考えられるこれらの小堅穴は、どうやら縄文時代早期後半に特徴的であると言えるようだ。⁽²⁾我々もよせの台遺跡の調査を通して不確実ではあるが同様な見通しを得た。今回の調査では小堅穴付近とは離れていたものの、1片ではあるが細久保段階と思われる押型文土器を得ることができ、さらにその感を強めた。

市域で調査された落し穴を有する遺跡はそれぞれ占地する地形に異なりをみせている。本遺跡の場合は小さな谷の詰った部分に設けられているのが特徴的である。谷のわざか下方には湧水や湿地帯が形成されており、谷筋にこれらの場所に集まる獣を捕獲するには、落し穴としての1号・2号小堅穴は相応の位置にあると言えるだろう。時代は異なるが、与助尾根から発見されている有舌尖頭器は、草創期の縄文人がやはりこの場所に獣を求めたことを思わせる。縄文時代でも前期前葉の5号住居址や中期後半の集落が形成された時期よりもさらに古い時代には、発掘区を含めた与助尾根・尖石周辺は、縄文人達にとって狩猟には恰好な地であったと思われる。

ところで、落し穴と考えられる遺構について問題提起の嚆矢となった城ノ平遺跡の報告では、

-
- 註 (1) 今村啓爾・他 1973 「霧ヶ丘」 武藏野美術大学考古学研究会
(2) 長崎元広・他 1974 「扇平遺跡」 岡谷市教育委員会
(3) 笹沢 浩・他 1976 「長野県更級郡大岡村鍋久保遺跡の調査」 「長野県考古学会誌」
第23・24号
(4) 宮澤 寛・今井康博 1976 「縄文時代早期後半における土壤をめぐる諸問題」 「調査
研究集録」 第1冊

土器も出土せず、また当時としては類例のないこともあり、この時点では中期の遺構とも考えている。しかし遺構の時期についてはとも角く、遺跡の在り方との関わりの中で、また出土遺物の時代的様相等から性格を論じておらず、以後の研究方向が示されたと言える。その後の1・2の例を上げれば、岡谷市扇平遺跡では別の地点にこの獵場を占有した集落の存在を求めている⁽¹⁾し、横浜市港北ニュータウン予定地内においても獵場と居住地とが分別されていた可能性が推測されているなど、落し穴としての遺構・あるいは狩場が、城ノ平での展望に沿って正しく地域史の中に位置付けられてきている。

先に、今回の発掘区を含めた与助尾根・尖石周辺は、縄文時代でも比較的古い時代には狩猟に適した場、いわば獵場であっただろうと推測した。それには、城ノ平の報告で示された研究方向に沿い、同時代の集団による日常生活の中心的場であった集落を、先ず別の地域に見い出して行かなくてはならない。殊に城ノ平の場合は配列の規則性等からほとんどが同時に存在したものと思われ、また2mちかくも掘り込んでいるとされる等、これらの遺構の構築にあたっては「集団的な人力による作業が必要」であったと考えられるからである。市域では、同時代の集落とみられる遺跡の存在は予測されてはいても明らかにされた遺跡は今のところない。したがって以後の調査に期すべき部分が多いのである、今後の調査にあたっては以上の点に十分留意して臨む必要がある。

第3節 第5号住居址について

第5号住居址は出土した土器、それに住居址の形態や構造からみて、縄文時代前期前葉の住居址と考えられる。尖石・与助尾根に関わる地域での同期の住居址は本例をもって嚆矢とする。

市域での同期の住居址は、宮坂英式氏が昭和27年に調査された芹ヶ沢区の神ノ木遺跡の竪穴住居址⁽²⁾と、下菅沢区の下菅沢遺跡の竪穴住居址に次ぐ3例目の発見となった。

-
- 註（1） 長崎元広・他 1974 「扇平遺跡」岡谷市教育委員会
（2） 宮澤 寛・今井康博 1976 「縄文時代早期後半における土壙をめぐる諸問題」『調査研究集録』第1冊
（3） 宮坂英式・宮坂虎次 1965 「夢科」茅野市尖石考古館
（4） 長野県教育委員会 1971 「長野県埋蔵文化財発掘調査要覧その1」長野県教育委員会
（5） 宮坂虎次 1976 「下菅沢遺跡中村遺跡」茅野市教育委員会

神ノ木遺跡の堅穴住居址は不整五角形状で、20本前後の柱穴や3ヶ所の地床炉と思われる部分、それに壁外と堅穴内に認められる周溝の数から、この堅穴は4回も拡張され、しかも堅穴埋没後に再び利用されたのではないかと報告されている。それだけに出土した遺物も実に豊富であり、何系統もの多量な土器、打石斧・石鎌・石槍・石錐・石匙・石刃が出土しており、特に石鎌は94点、石匙は17点と多く、土製輪等の特殊な遺物さえも出土している。

一方2例目の発見となった下菅沢の堅穴住居址は、褐色土中に軟弱な床面をもつ住居址であったためプランは完全に把握できなかった。しかし生活面から発見された遺物の範囲からみて、プランは隅丸方形をとるものと思われる。炉址は地床炉であり、床はローム層まで掘り込みますに褐色土中に設けられ、炉を中心とした範囲のみが堅かった。周溝は認められず柱穴も発見されていない。このような下菅沢の堅穴住居址の特徴は、第III章第1節で記した本遺跡の第5号住居址の在り方と共通した部分が多い。また、下菅沢の堅穴住居址から出土した石器は石鎌2、側縁に稜を有する磨石斧1、磨石1であり、本遺跡第5号住居址の石器組成と類似している。両者の出土遺物にはこの他に若干の土器があるが、出土遺物の量と種類は、土器にみられる類型の寡多同様まったく神ノ木の比ではない。

以上の堅穴住居址や出土遺物にみられる神ノ木と下菅沢・与助尾根南との相違は、また両者の占地形についても言い得る。神ノ木の場合は渋川に臨む広く平坦な広い台地上に占地しているが、下菅沢・与助尾根南は共に平坦部の狭い尾根状の地形に占地しており、両者の占地形はまことに好対照である。下菅沢の場合は遺構の存在が予測される部分をかなり広範囲に調査しているにもかかわらず、発見された遺構は褐色土中に設けられた堅穴住居址一基のみであり、その他の施設はなにも発見されていない。本遺跡の場合もまた同様な結果が得られた。また、神ノ木の場合は住居を何回も拡張利用しているらしいのに比べ、下菅沢・与助尾根南では柱穴すらも発見されていない。それに下菅沢の堅穴住居址の床面はローム層まで掘り下げることなく褐色土中に設けており軟弱であったし、また本遺跡第5号住居址の床面も軟弱であった。このことは、下菅沢や本遺跡の堅穴住居が長期に渡り、あるいは頻繁に利用されなかつた結果であると考えられ、神ノ木の堅穴住居とは異なる事象に由来するものと言わなくてはならない。

以上いくつか指摘してきた神ノ木と下菅沢・本遺跡との様相の差は、両者を同様な性格にある遺跡として評価できないことを物語っている。両者の性格を理解するにはまだまだ多くの問題が残されているが、下菅沢や本遺跡のような遺跡については、「尾根中央部からただ一基の住居址のみ検出されたことは、他の遺跡の例と相俟って、この期においては、一定の規模構造の堅穴住居址を構築する定着性を有しながらも、それは極めて小集団の生活であったと考えら

れる」とする仮説が提出されている。小集団の生活が一時的・季節的なものであったのか、または生活形態や出自の異なる別系統の集団であったのかは不明だが、この仮説から逆に、下菅沢や本遺跡とは異なる神ノ木のような遺跡の性格も推定しておこうと思う。

神ノ木は極くわずかな部分を調査したのみではあったものの、その規模の大きさを窺わせるに十分な資料が得られており、注意して行かなくてはならない遺跡である。また神ノ木のような遺跡については下菅沢や本遺跡のような遺跡の存在なくしては語り得ないのも事実である。具体的には、前期前葉の竪穴住居址は小さな尾根上にも普遍的に構築されていた可能性もあるのであり、以上のような尾根についても十分注意を払う必要があることを、下菅沢の竪穴住居址や本遺跡の第5号住居址が物語っているのである。

第4節 中期後半の集落について

昭和25年に発見された石圓¹住居址の存在から、この地域にも住居址が存在することは疑いないことであった。しかし新たに4基の住居址が発見され、そのうえ石棒・土偶が出土するなどと、尖石・与助尾根²遺跡との関係、また占地する地形の在り方から判断して、以上の結果はまったく予測し得なかった成果であった。

1 住居址

発見された4基の住居址のうち、2号・3号住居址は尾根の南傾斜部に構築されているため、南壁と南側床面の一部は既に流出している。しかし構造や平面形については埋甕や柱穴の位置それに東西の壁と床面の在り方から十分に理解し得る。また、4号住居址は東側1/2ほどの部分が削奪されてはいるが、これについてもプラン等は窺知し得るものであった。ここでは各住居址の属性を、最も関係深いと考えられる尖石遺跡と与助尾根遺跡の住居址との関係の中に位置付けて行くことにする。

平面形 平面形は、北壁が直線的な在り方を呈し、東西両壁が丸味を有する隅丸方形に類似した形態をもつものが1号・2号・3号住居址であり、4号住居址は円形を呈する。

隅丸方形に類似する形態の住居址は与助尾根第15号址に典型的な類例を見い出すことができる。また、円形の住居址は与助尾根第16号址等に類例があり、隅丸方形・円形とともに尖石・与

註(1) 宮坂虎次 1976 「下菅沢遺跡中村遺跡」茅野市教育委員会

(2) 宮坂英式 1957 「尖石」茅野町教育委員会

助尾根では正常形とされている。しかし4号住居址の円形プランは、本遺跡の中に限って言えば、他の住居址が隅丸方形をとるのに対し円形という特異なプランであると言える。

深さ 本遺跡の占地する尾根は東に高く西へ低い。このため発掘区での東西両端の比高差は約5mほどある。

住居址は、1号住居址が平坦部から緩傾斜部に移行する位置に、2号・3号住居址は尾根の南側の緩傾斜面に、4号住居址は尾根の北側肩部の平坦面に各々位置している。したがって各住居址の掘込みは東と北側に深く南側に浅い。住居址のローム面から床面までの深い部分の掘込みは、1号住居址22cm・2号住居址35~40cm・3号住居址35cm・4号住居址24cmほどである。尖石・与助尾根でのローム面からの掘込みの深さは平均30cmと報告されているから、本遺跡の場合もこれに準ずると言える。

規模 各住居址の規模は、1号住居址450cm×470cm・2号住居址510cm×524cm・3号住居址430cm×440cm・4号住居址330cm×350cmであり、4号住居址は他の住居址に比べ極めて小規模である。

1号・2号・3号住居址は尖石・与助尾根では一般的な大きさとされる規模の住居址である。また、これらの住居址よりも小型である4号住居址に類似する住居址は与助尾根に4基ある。4号住居址は類似する規模の住居址が与助尾根にはあるものの、本遺跡の中にはあっては、他のほとんど共通する規模の3基の住居址とは異質な規模にある。

方向 住居の出入口部については宮坂の報告に詳しいので、これを参考に住居址の主軸線の在り方から出入口部の方向をまとめておこう。

1号住居址の出入口部はS6°W・2号住居址はS19°W・3号住居址はS40°Wと、各住居址とも真南よりも若干西へ偏向している規則性にある。出入口部からみた住居の方向は、丁度出入口部を尖石方向に向け、背を与助尾根に向けた形となっている。

尖石・与助尾根ともに方向に一定の規則性をもたない住居址が何例かあるなかで、本遺跡の場合はすべての住居址に一致した方向性が保たれている。このことは、これらの住居址が当初からの集落計画に基づきつつ、同時に存在していたことの旁証であると言えるだろう。

床面 床面は各住居址とも水平に設けられており、堅緻である。ただし3号住居址は傾斜面に構築されたため、床の南側半分ほどの部分を黒土中に張床をして設けており、この部分にのみ凹凸があり軟弱であった。しかしローム中の床は堅緻なものであった。このことは住居の構造そのものと相まって、定住性の強い生活が行われていたことを示している。

炉址 炉址は各住居址とともに一個所、中央より奥へ寄った位置に設備されている。いずれも

隅丸方形にちかい掘り方からなり、規模も4号住居址のものが比較的小型である他は、尖石・与助尾根で一般的とされたと同様な深さと大きさにある。ただし1号住居址の炉址は、以上のような一般的な規模の主体部と思われる部分に付属施設が備わった特殊な形態を示す点、注意される炉址である。

1号住居址の炉址と同様な付属施設を伴う炉址は、尖石・与助尾根は勿論のこと八ヶ岳山麓の諸遺跡にも類例を知らない。時間的に複式炉との関係が想定されるが、構造的にも空間的にも類縁関係が迫れないため、その性格については不明だと言わざるを得ない。

炉石はいずれの住居でもその一部かほとんどが撤去されており、これらの住居が同時期に廃棄されたことを窺わせる。4号住居址も東側の炉石が撤去されていたものと思われるし、また昭和25年にJ・K・L-14列辺に発見された石匂炉址にもその可能性が指摘されるところである。3号住居址の炉址内に凹石を含む疊が不規則に集石していた事実も、炉石の撤去と一緒に事象を想定させる。炉石の撤去された炉址内に石棒片や完形土器等が遺存している例はしばしばある。

柱穴 各住居址の主柱穴は4号住居址以外は4個所があり、その配置関係や形態には共通性が認められる。この4本主柱は尖石・与助尾根では常態とされた柱穴数である。

4号住居址の柱穴は、残存部では出入口部の施設と思われる浅く小さなピット以外は検出されなかった。また、削奪された東側についても在存する西側の状態からみて柱穴は設けられていた可能性は少ないものと思われる。したがって、4号住居址は宮坂の指摘するように、「その上屋は特殊の構造によって施設されたものであろうか」と考えられる住居址である。

周溝 4基の住居址はすべて一条の周溝をもつ。1号と3号住居址はほぼ全周し、2号と4号住居址は西壁下に認められる。周溝は各住居址とも10cm前後の深さにあるが、2号住居址の周溝のみ比較的深く設けられている。また1号住居址の周溝内には小ピットが設けられている。

埋甕 埋甕は2号・3号住居址に埋設されていた。いずれも住居の出入口部とみられる柱穴間であり、2号住居址の埋甕は1号住居址の埋甕よりもやや外側に向った位置に埋設されている。埋甕は2体ともに正位の状態に埋設されており、石蓋を有しない。器形は深鉢形で、2号住居址の埋甕は底部を抜いた胴下半部、3号住居址の埋甕は口縁を打ち欠いて調整している。

尖石・与助尾根での2号住居址と同様な埋甕を有する住居址は尖石20号址・同28号址があり、3号住居址と同様な埋甕を有する住居址は未発見である。しかし石蓋の有無を不問とした場合の3号住居址の埋甕に類似する埋甕は、与助尾根4号址にある。

豎穴 住居に付属すると考えられる豎穴は3号住居址に1個所検出されている。その位置は入口部をは入った左、炉址の西側の住居内でも比較的広い空間部にある。豎穴は開口部が82cm×70cm・深さ20cmの横円形を呈している。豎穴内からはなにも出土しなかったが、食糧の貯蔵穴としては小型であることと、豎穴の設けられた位置が住居内の作業場と考えられる空間の一部であることから、この豎穴の性格も自と理解されるだろう。また、住居の東北壁中に張り出す形に設けられている豎穴状の施設は、その底面が住居床面と同レベルである点において、住居床面から掘り込まれた豎穴とは異なる。この豎穴状の施設と同様な位置に同様な規模を有する豎穴が設けられた住居址には尖石7号址があり、類似する例に与助尾根7号址・24号址がある。しかし以上の例はいずれも住居床面よりも深い位置に底面を設けている。

炉址と奥壁間の焼土址 1号住居址に検出されたこの遺址は、本住居址の炉址とは異なる意義のもとに焚火のなされたことを物語る遺址である。遺物や炭化物等、この焼土址の性格をより具体的に説明付けられるようなものは出土しなかったけれど、他の住居址と比較した場合、この焼土址はその存在自体が特殊な行為の執り行われたことを意味していると言える。

炉址と奥壁間にこのような焼土址を有する住居址は尖石・与助尾根とともに未発見ではあるが、この部分に石壇や特殊なピットを有する住居址の存在は知られている。これらの炉址と奥壁間に設けられた石壇や特殊なピット等が何らかの祭祀的な性格にあるものと考えられるからには、本址もまた以上の範疇で理解してよいものであろう。ましてや以上の施設が炉址とその火に強く関係する祭祀の施設であるとすれば、本址はそのような火をも含め、火に関する祭祀のより具象的な姿相であるだろう。

2 住居址の分類

以上各住居址の属性のいくつかを、尖石・与助尾根両遺跡の住居址との関係の中で検討してきた。それによると本遺跡の各々の住居址の属性は、1号住居址の炉址に付属する施設以外はその類型においてまったく固有なものではなく、尖石・与助尾根両遺跡の住居址の属性の類型の中に位置付くものであることが理解できた。このことは、本遺跡を含めた3遺跡がまったく無関係といった関係ではなく、むしろ何らかの強い関係にあったことを推察させるものであった。次ぎに、それぞれ検討してきた属性を基に住居址を分類しておこう。

第1類

註（1） 水野正好 1969 「縄文時代集落研究への基礎的操作」『古代文化』第21巻第3・4号

（2） 桐原 健 1969 「縄文中期にみられる屋内祭祀の一姿相」『古代文化』第21巻第3・4号

平面形が楕丸方形で4本主柱をもつ住居址で、1号・2号・3号住居址が相当する。これらの住居址は規模もほぼ同じであるが、埋臺の有無により2分される。

第1類A 住居出入口部に埋臺を有し、炉石がほとんど持ち去られている2号・3号住居址。

第1類B 埋臺を有さず、複式炉様の炉址と焼土址を有す1号住居址。炉石は取り外されているが持ち去られてはいない。

第2類

平面形が円形で主柱穴を有さない4号住居址。住居址の規模も小さく、第1類住居址の約1/2ほどの大きさである。

3 集落構成と若干の問題点

発見された各々の住居址は、その出土遺物からみても同時に存在した可能性が強い。このことは、住居址の配置関係や方向等、各々の住居址に統一した関係の存在が認められることからも首肯されるだろう。昭和25年に発見された石囲炉址から推定される住居も、住居址の尾根上における配置の在り方から判断する限りでは、この住居も今回発見された4基の住居址と共に同一時期の住居であったものと思われる。したがって、本住居を含めた5軒の住居は、第2類の4号住居址を除いて等間隔に地形に沿って帯状に分布している。これらの住居址は第1類住居であり、石囲炉址から推定される住居もおそらく第1類に含まれる住居であったと思われる。

第1類住居は以上のように尾根地形に沿って帯状に分布するものの、第1類A住居は分布内の西方、尾根の先端部に近い南の緩傾斜面に位置している。また第1類Bとした1号住居址は、第1類A住居とは対照的に発掘区東側に位置しており、第1類住居でもAとBの二者は分布域を異にするものようである。

第2類とした4号住居址は発掘区北東角の尾根の肩部に位置しており、住居址の構造とともに集落内での位置にも特異性が現れている。本址の北、沢を隔てた本址の真向いには、本址と規模や構造が類似し、しかも石棒を出土した与助尾根集落の住居域の東限に位置する第26号址が対峙しており、両者に共通した集落内での性格が窺われる。

以上、類別された住居址の特徴と分布の在り方から、第1類住居はある種の共通性に貫かれてながらも、A住居とB住居では性格の異なる面が認められる。このことは、おそらく祭祀を中心とする事象の一部であると思われ、両者がそれぞれに祭祀を分掌していた可能性も考えられるところである。また第2類住居とした4号住居址は、第1類住居とは集落内での性格の系譜を異にする住居であるとみられ、その内容については多くを知り得ないものの、与助尾根第26号址に通じた性格の住居であったと思われる。

住居の分布は全体として尾根地形に沿った帶状の分布を示している。この分布の在り方は、桐原氏の言うリボン状の分布形態の片一方、換言すれば、水野正好氏の言う与助尾根の東西兩群の一方の分布形態に酷似しており、一つのまとまった姿をみることができる。

住居址以外の遺構は第2類A住居周辺にのみ発見された。曾利II式期のJ-24特殊遺構、それに石棒と土偶を近くに有する包含層の存在は、この地区が集落内でのある種の祭祀の場となつたことをよく物語っている。特に包含層近くから発見された石棒と土偶の存在は、遺物廢棄に伴うある種の祭祀が執行されたことを思わせるものであった。

これらの遺構は上に述べたこと以外にもまた重要な所見を与えている。それは、当初からの計画的な集落設計に沿って規則的に配置されたと考えられる住居群の中にあって、曾利II～III式期後半に渡って主体的に形成された包含層が、尾根の南斜面から先端部へかけての部分にのみ存在したと考えられたこと。また、曾利II式期のJ-24特殊遺構が、2号・3号住居址の丁度中間位にあたる、両者と重複しない位置に設けられていることである。以上のこととは、同一時期に廃棄されたと考えられる全ての住居址が拡張や建直しを行っていないこと、それに発掘区全体から出土した土器がほとんど曾利II～III式期のものであることを含め、これらの遺構等は、各住居址が曾利II式期から継続して曾利III式期まで営まれたことを意味しているのではないだろうか。埋蔵との問題が未解決ではあるものの、以上の所見をまったく否定しきることもできないだろう。

なお、曾利III式期後の土器片も若干出土しているため、その後もなお人々が付近で生活したようだ。遺構は未発見であるが、尖石・与助尾根で発見されている同時期の遺構や遺物にこれらの人々の関係が考えられる。

ところで本遺跡は、尖石本台地での特殊遺構群からなる共同広場と考えられる空間から約70mほどの位置にあり、与助尾根とは幅20mほどの沢を挟んで対峙している。本遺跡と尖石・与助尾根とはまさしく指呼の位置にある。

尖石や与助尾根では共同の広場と言えるような空間が住居域の背後に認められるが、本遺跡の場合は屋外祭祀の行われた場はともかく、小窓穴等を有する共同広場と言える空間は地形的にみても存在しない。しかし上に述べてきたように、各住居址は各々に祭祀的な性格を有して

註(1) 桐原 健 1964 「南信、ハケ岳山麓における縄文中期の集落構造」『古代学研究』

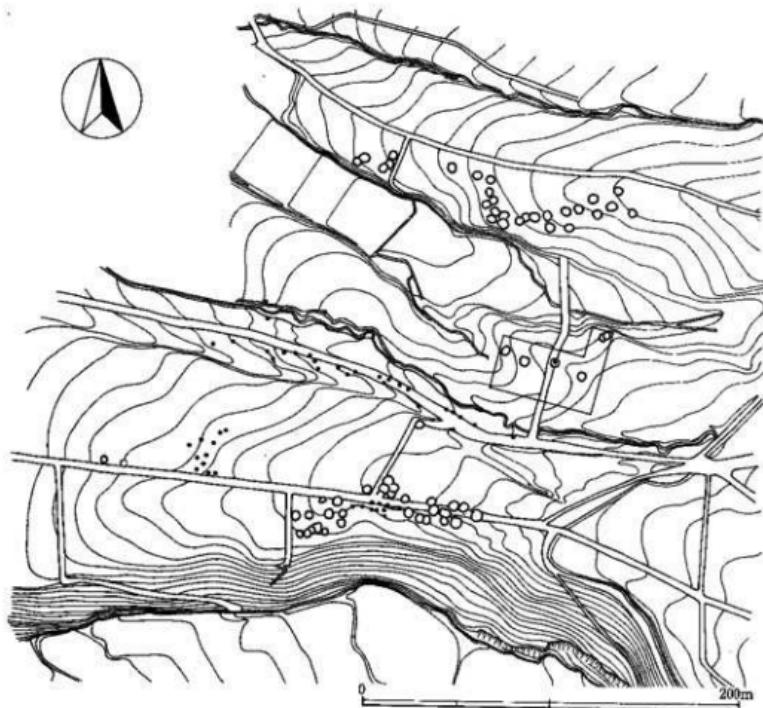
第38号

(2) 水野正好 1969 「縄文時代集落研究への基礎的操作」『古代文化』第21卷第3・4号

いるし、また屋外からは石棒と土偶が出土しており、尖石・与助尾根に狹まれた形の小さな集落である本遺跡も一通りの祭祀体系を有している。

出土した土器はほとんどが煮沸用の深鉢形土器であり、他にいくつかの別な器種も揃っている。包含層から出土した土器片も煮沸用の深鉢形土器の破片が圧倒的に多かった。

石器は前期の5号住居址出土のものを除き、また遺構外の出土品をも含めた生産用具としての石器の組成は、石錐3・打製石斧5・磨製石斧1・局部磨製石器1・横刃形石器2・不定形な黒曜石製の剝片石器6・凹石9・磨石1である。各遺構別の石器組成については第1表を参照されたいが、最低2時期に渡って継続して生活が営まれたと考えられる遺跡にしては、全石器の組成は貧弱であると言わざるを得ない。しかし以上の石器群の中にあって凹石は比較的安定した存在であり、凹石によって裏付けられる生産活動の活発さの一端が理解される。これら



第34図 尖石・与助尾根・与助尾根南遺跡の住居址と炉址の分布図 (1/3,000)

の凹石には磨痕の認められるものがあり、また磨石が出土していることは、間接的ではあるが石皿の存在を裏付けてもいる。このことは、出土した土器がほとんど煮沸用の深鉢形土器であったことと相俟って、本遺跡においても日常の消費活動が活発に行われていたことを物語っているのだろう。

以上いくつか指摘してきたように、本遺跡は地形上の制約もさることながら、共同の広場をもつ所謂大型の集落ではない。しかし本集落が一つの独立した地形に占地し、小集落ながらも一つの祭祀体系を保持していることは、土器や石器にみられる日常の活発な消費活動と共に、本集落が尖石や与助尾根集落の一部ではなく、ある種の別個の組織をもった集落であったとみなせる。しかし三者は同一台地を基幹として成立する集落であり、特に与助尾根とは共同の水場を管理運営していたものと思われるなど、三者は社会的にも経済的にも強い結び付きをもつ集団関係にあったと言える。

社会的な関係は、本集落が共同の広場をもたない集落であることから、大きな共同広場を有する尖石や与助尾根との双分組織・ⁱⁱⁱ3分組織といった関係にあったことも十分考えさせられるところである。また、三者共にそれぞれ継続する同時期の集落であった可能性が強く、領域内での移動の結果としては理解しにくい面がある。このことは、三者が同じ領域内において存続し得た経済的な保障が、三者の間に諒解されていたとみなくてはならない。

このようにみてくると、本遺跡の存在は集団や共同体の問題、さらにはそれらの問題をも含めた領域の問題等、実に多くの重要な課題を内包していると言える。具体的には、本集落の評価如何によってはおそらく尖石と与助尾根の各々の関係も変わってくるものと思われるのであるが、以上の点については将来の検討にまたなくてはならない。

(鵜飼幸雄)

註(1) 水野正好 1974 「集落」『考古学ジャーナル』第100号縄文時代所収

第VI章 結語

今回の与助尾根南遺跡の発掘調査は、前章に詳細に述べられているように思いがけぬ成果であった。かつて炉址が発見されていたとはいえ、尖石台地の北縁に、しかも与助尾根遺跡に近接して、小規模ながらも同時期に集落がつくられていたことは、縄文中期の集落構成、社会構造を解明する上に新たな資料を加えたということができよう。それとともに、一つの遺跡を完全に調査究明するということのむずかしさを痛感するものである。若し考古館建設という事業がなければ、この遺跡は尖石台地の特別史跡指定区域からはずれた片隅で、埋蔵文化財の包蔵する可能性の少ない区域として、永遠に解明する機会は訪れなかつたであろう。考古館建設という大義の前の埋蔵文化財の破壊であったかも知れないが、今後の遺跡調査に、この経験が生かされるならば、これもまた一つの成果であろう。

前期住居址が一基ばかりと発見されたことも意外であった。それに中期住居址が重複して作られていたことは、この位置が与助尾根の溪の湧水と密接な関係をもつものであり、前章で論述されているように、前期遺跡の性格と、その立地について一資料を加えるものである。

かつて、与助尾根遺跡から有舌尖頭器と梢円押型文土器破片が各一点づつ発見されている。八ヶ岳山麓台地の遺跡は、その殆んどに縄文中期遺跡が立地するといつても過言ではない。多量に出上する中期遺物や、画然とロームに掘りこまれた堅穴住居址により、それ以前の文化層が攢乱され、ともすれば僅少な資料は見逃がしがちとなる。原村大久保下の遺跡から先土器時代の石器群の発見されたことと考え合わせ、先土器時代遺跡発見の可能性を含めて充分注意する必要がある。

明治年間にすでに中央学界に報告され、全国にさきがけて集落の発掘調査が行われた尖石遺跡の重要性が今回の発掘により再確認された。そして調査された区域が全面積の何分の一にも満たない尖石遺跡には、残された部分になお貴重な資料が埋もれていることと思う。

尖石遺跡は、早く史跡に指定されたため、村人の善意や、多くの人達の協力により、今日まで守られて來た。しかし、その大部分が民有地の畠であるため、農業技術の進歩と機械化に伴い、地下の遺構がなしくずしに破壊されるおそれがある。また、指定区域外はいつどのように変貌するか予測できない。今後、このことについて適切な対策を樹立するとともに、なお一層の考古館の充実と、遺跡の保護活用を心から希うものである。

(宮坂虎次)

註 參 考 文 獻

- イ 今井真樹 1933「豊平村尖石遺跡」「長野県史跡名勝天然記念物調査報告書」第16輯
今村啓爾・他 1973「霧ヶ丘」武藏野美術大学考古学研究会
- キ 桐原 健 1964「南信、八ヶ岳山麓における縄文中期の集落構造」「古代学研究」第38号
桐原 健 1969「縄文中期にみられる屋内祭祀の一姿相」「古代文化」第21巻第3・4号
- コ 小平小平治 1893「長野県下佐久郡古墳及諏訪郡石器時代遺物」「人類学雑誌」第9巻第9号
- サ 笹沢 浩・他 1976「長野県更級郡大岡村鍋久保遺跡の調査」「長野県考古学会誌」第23・24号
佐藤 攻・他 1970「茅野和田遺跡」茅野市教育委員会
- ス 末木 健 1978「伊那谷中部縄文中期後半の土器群とその性格—予察—」「信濃」第30巻第4号
- ト 戸沢光則 1950「与助尾根発見の新資料」「史実誌」第4号
戸田哲也・大矢昌彦 1979「神ノ木式・有尾式土器の研究(前)」「長野県考古学会誌」第34号
鳥居龍藏 1924「諏訪史第一卷」信濃教育会諏訪部会
- ナ 長崎元広・他 1974「脛平遺跡」岡谷市教育委員会
長野県教育委員会 1971「長野県埋蔵文化財発掘調査要覧その1」長野県教育委員会
- マ 増子康真 1978「縄文中期後半土器の編年—東海地方西部地域—」「古代人」第34号
松永満夫・他 1975「長野県中火道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」長野県教育委員会
- ミ 水野正好 1969「縄文時代集落研究への基礎的操作」「古代文化」第21巻第3・4号
水野正好 1974「集落」「考古学ジャーナル」第100号縄文時代所収
- 宮坂虎次 1976「下菅沢遺跡・中村遺跡」茅野市教育委員会
宮坂虎次・他 1978「よせの台遺跡」茅野市教育委員会
宮坂英次 1937「信濃国諏訪郡上場沢の遺跡」「中部考古学会彙報」第2年第6報
宮坂英次 1938「八ヶ岳山麓の土偶報告」「ひだびと」第6巻第11号
宮坂英次 1939「八ヶ岳山麓の土偶」「ひだびと」第7巻第1号
宮坂英次 1955「長野県諏訪郡中原遺跡」「日本考古学年報」3
宮坂英次 1957「尖石」茅野町教育委員会
宮坂英次 1964「長野県茅野市長峯遺跡」「日本考古学年報」12
宮坂英次・宮坂虎次 1965「夢科」茅野市尖石考古館
宮澤 寛・今井康博 1976「縄文時代早期後半における土壤をめぐる諸問題」「調査研究集録」第1冊
- ヤ 八幡一郎 1895「信濃諏訪郡豊平村広見発見の土偶」「人類学雑誌」第37巻第8号
- ヨ 米田明訓 1978「曾利式土器編年の基礎的把握」「長野県考古学会誌」第30号

発掘調査関係者名簿（敬称略）

1 与助尾根南遺跡調査委員会

委員長 小平延門（尖石保存会長）

副委員長 宮坂篤夫（尖石保存会副会長）

委員 小平留男（尖石保存会委員）

〃 小平昭三（〃）

〃 宮坂正二（〃）

〃 小平信之（〃）

〃 柿沢 拓（〃）

〃 牛山安海（〃）

〃 木川千年（教育長）

〃 小平善幸（尖石考古館長）

〃 矢島雅幸（社会教育課長）

調査員 宮坂虎次（尖石考古館）

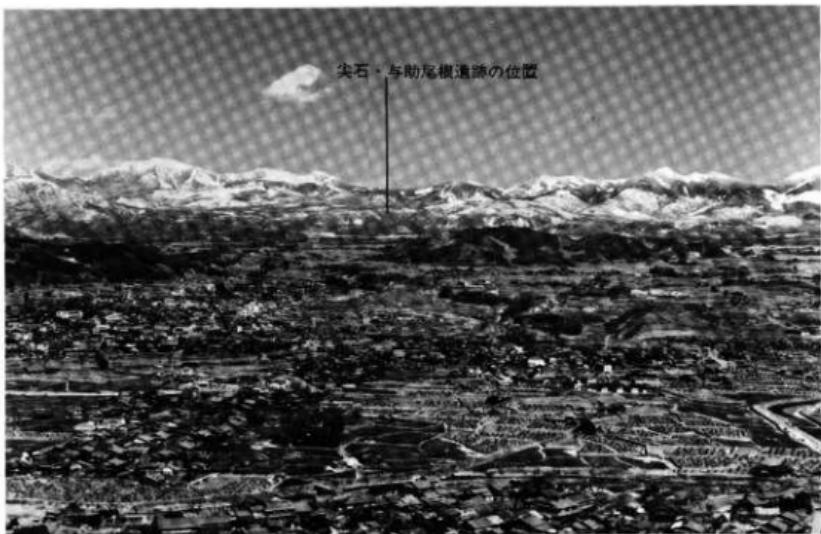
〃 鵜飼幸雄（〃）

2 事務局

事務局長 木川千年（教育長）・事務局次長 矢島雅幸（社会教育課長）・事務局係長 永田
桃介（社会教育係長）・局員 小口秀孝・植松幸子・湯田坂公子・宮坂虎次・鵜飼幸雄（社会
教育係）

3 発掘調査協力者

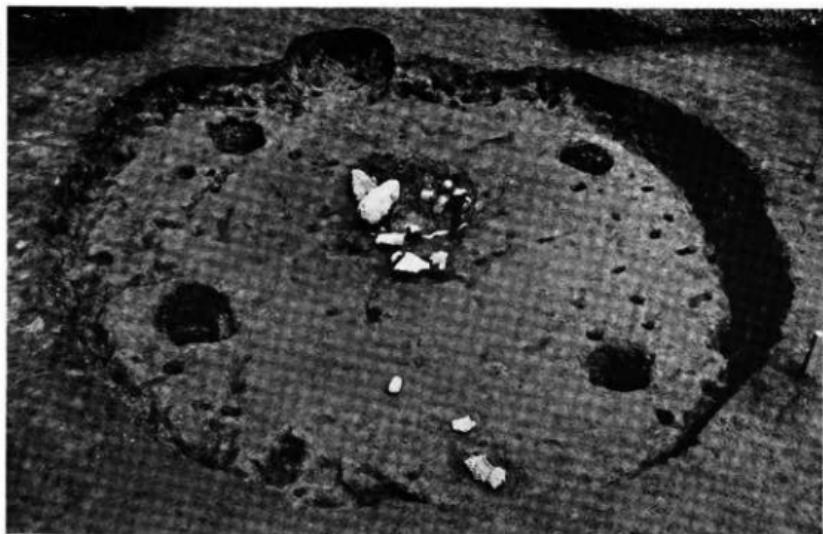
牛尾すみえ・牛山かつ子・牛山徳博・遠藤昭男・小平いく・小平佐吉・小平さだ子・小平孝江
小平 忠・小平富子・小平房江・小平みつよ・小平みね子・藤原三恵・清水恒由・原田 力・
藤森和助・宮坂国夫・宮坂みよし・宮坂吉喜・宮坂篤夫・守矢昌文・岡角よ志美・柳平嘉彦



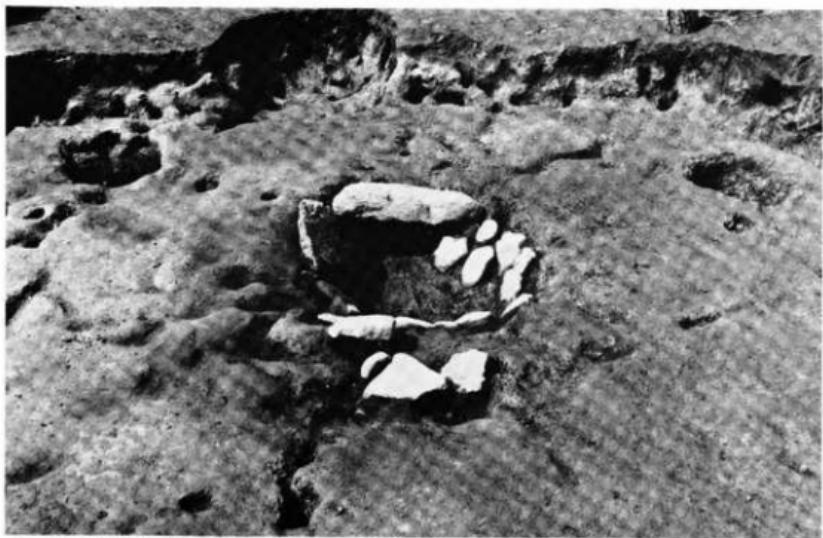
1 八ヶ岳西山麓と遺跡の位置



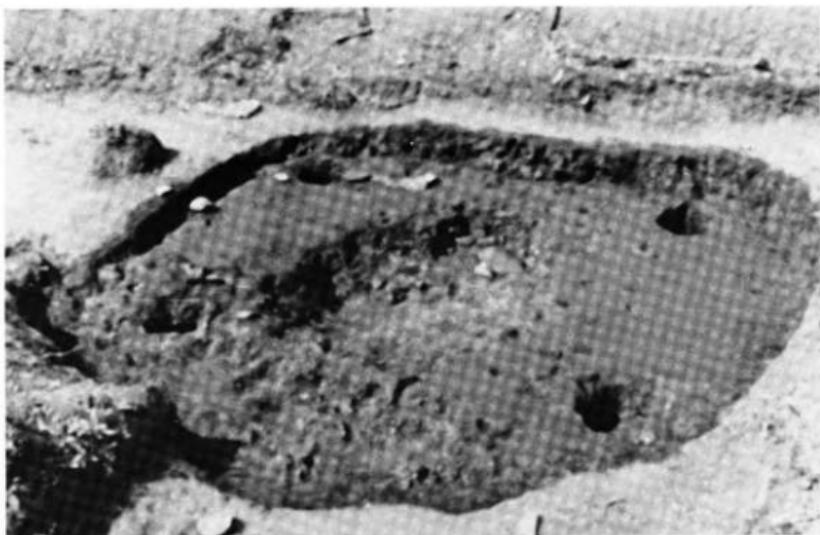
2 発掘区全景



1 第1号住居址



2 第1号住居址 灶址と周辺の状態



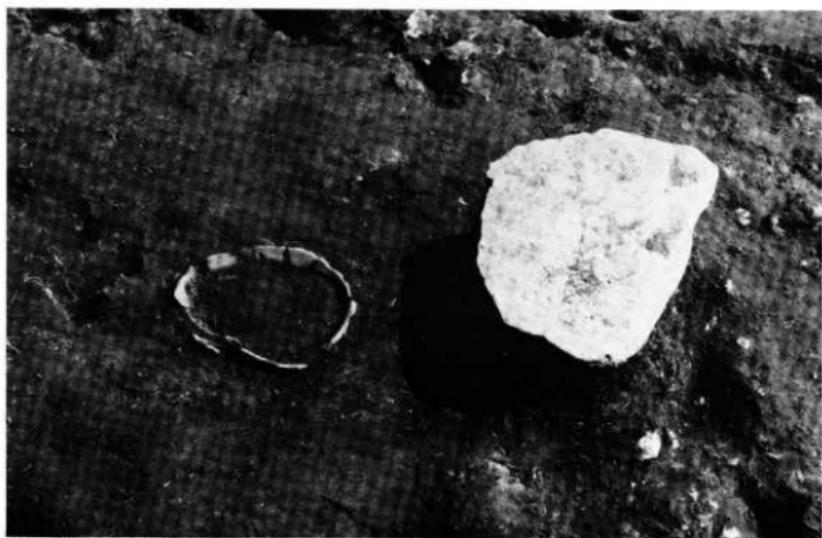
1 第2号住居址



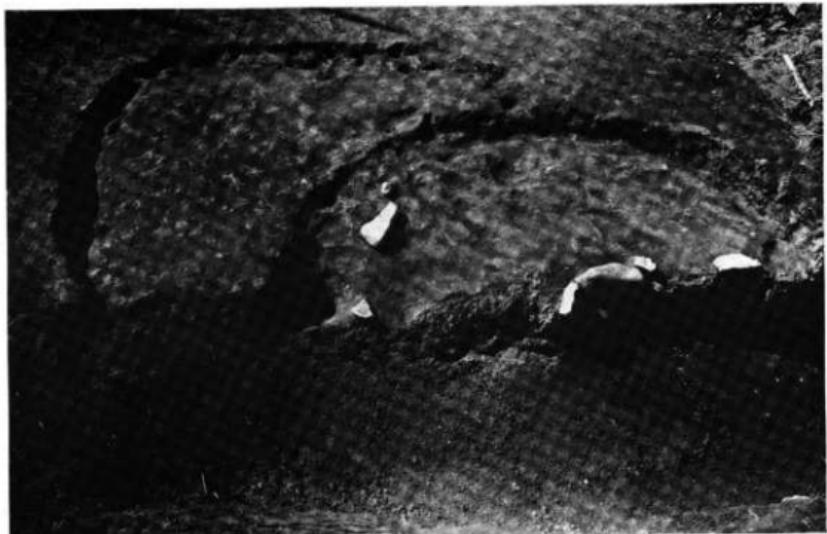
2 第2号住居址 炉址北側床面の配石



1 第3号住居址



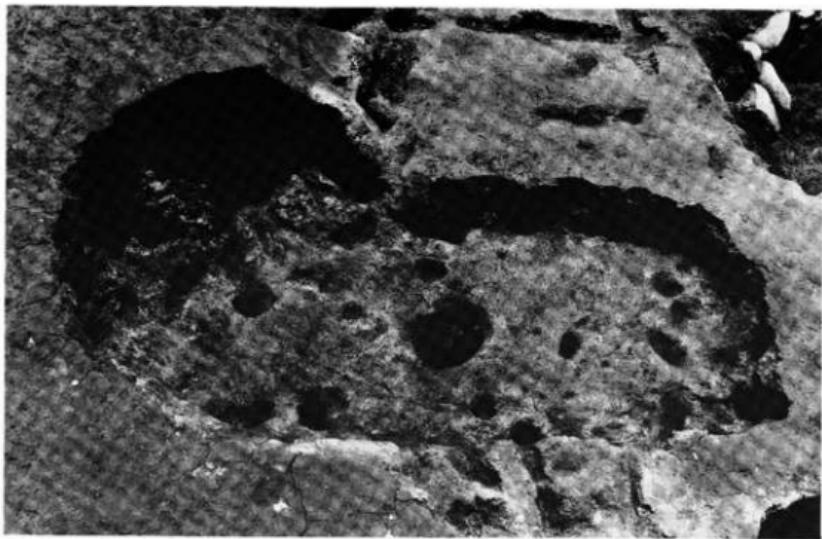
2 第3号住居址 埋甕



1 第4号・第5号住居址



2 第1号小竪穴



1 第2号小竪穴



2 第2号住居址炉址と第3号小竪穴



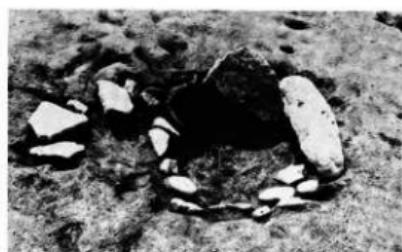
1 J-24特殊遺構



2 G-23・H-23グリッド 四石・石棒・土偶出土状態



1 第1号住居址 炉址検出の状態



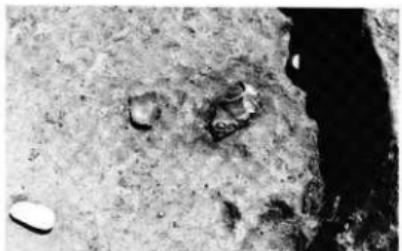
2 第1号住居址 炉石復元の状態



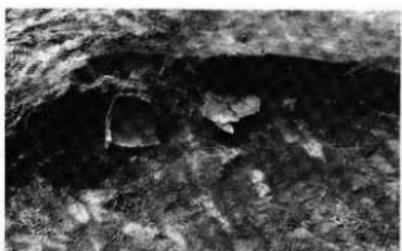
3 第2号住居址 炉址



4 第3号住居址 炉址



5 第1号住居址 遺物出土状態



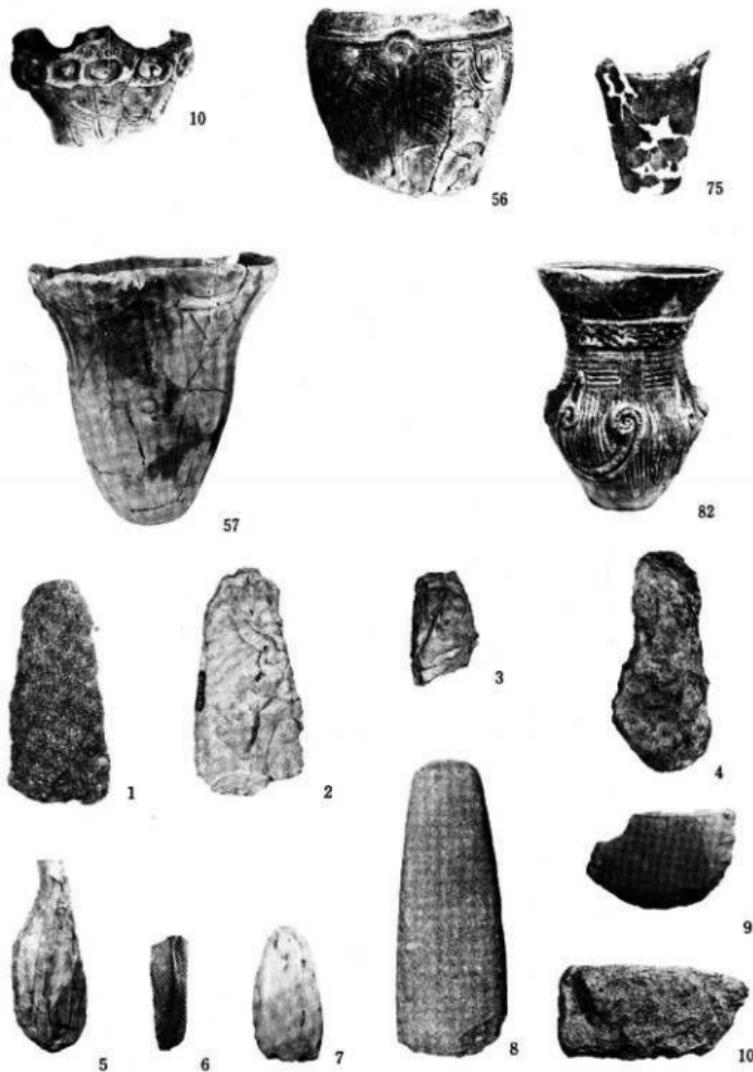
6 第3号住居址 遺物出土状態



7 H-23グリッド 四石・石棒出土状態



8 G-23グリッド 土偶出土状態



出土土器(36)・出土石器(36)



出土石器(1~11, 3%)・石棒(12, 3%)・土偶(13, 3%)

与助尾根南遺跡

昭和55年1月25日 印刷

昭和55年2月3日 発行

発行所 長野県茅野市塚原2-6-1
茅野市教育委員会

印刷所 長野県岡谷市川岸108番地
中央印刷株式会社

(非売品)

